

も ばら きた はら い せき
茂原北原遺跡
(C区)

平成27年4月

宇都宮市教育委員会

序

本遺跡の周辺には、飛鳥時代の「評家」の遺跡と推定されている西下谷田遺跡や奈良時代の河内郡の役所跡と考えられている上神主・茂原官衙遺跡など、当時、この地域が古代河内郡の中心であったことを示す遺跡が所在しています。

本遺跡内でもこれまでに道路拡幅工事や集合住宅建設工事等において古代の竪穴住居跡が確認されており、同時代の集落跡が存在していることが判明していました。

今回、集合住宅の建設に伴い影響を受けることとなった本遺跡の取扱いにつきましては、事業者をはじめ、関係機関との協議の上、記録保存のための発掘調査を実施することとなりました。その結果、古代の竪穴住居跡が7軒確認され、官衙周辺に所在した一般集落の一部を記録保存することができました。

本報告書は、発掘調査において得られた成果をまとめたものであり、多くの方々がさまざまな方面でご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、埋蔵文化財の取扱い協議から発掘調査、そして報告書作成・刊行に至るまで多大なるご協力とご理解をいただきました。地権者並びに関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成 27 年 4 月

宇都宮市教育委員会

教育長 水 越 久 夫

図 版 目 次

- 図版1 A. 1区全景(南より) B. 2区全景(北より) C. 3区全景(東より) D. 3区西半部(東より)
- 図版2 A. 調査前遠景(北より) B. 調査前近景(南西より) C. 調査前近景(北東より) D. 調査前近景(南より) E. SI-1東西土層(南より) F. SI-1完掘(南より) G. SI-1掘方南北土層(東より) H. SI-1掘方(南より)
- 図版3 A. SI-1カマド完掘(南より) B. SI-1カマド掘方(南より) C. SI-1遺物出土状態(南より) D. SI-1遺物出土状態(南より) E. SI-2東西土層(南より) F. SI-2完掘(南より) G. SI-2掘方(北より) H. SI-2掘方(南より)
- 図版4 A. SI-2カマド完掘(南より) B. SI-2カマド南北土層(東より) C. SI-2カマド掘方(南より) D. SI-2遺物出土状態(南より) E. SI-2遺物出土状態(南より) F. SI-2遺物出土状態(南より) G. SI-3南北土層(東より) H. SI-3完掘(東より)
- 図版5 A. SI-3完掘(南より) B. SI-3掘方(南より) C. SI-3掘方(東より) D. SI-3カマド南北土層(南東より) E. SI-3カマド東西土層(南より) F. SI-3カマド完掘(南より) G. SI-3カマド南北土層(南東より) H. SI-3カマド掘方(南より)
- 図版6 A. SI-3カマド付近遺物出土状態(西より) B. SI-3炭化物出土状態(南より) C. SI-4東西土層(南より) D. SI-4南北土層(東より) E. SI-4完掘(南より) F. SI-4完掘(西より) G. SI-4掘方(南より) H. SI-4掘方南北土層(南より)
- 図版7 A. SI-4カマド東西土層(南より) B. SI-4カマド南北土層(東より) C. SI-4カマド遺物出土状態(南より) D. SI-4カマド遺物出土状態(南より) E. SI-4カマド掘方(南より) F. SI-4遺物出土状態(南より) G. SI-4遺物出土状態(南西より) H. SI-4遺物出土状態(南より)
- 図版8 A. SI-5東西土層(北より) B. SI-5完掘(東より) C. SI-5完掘(南より) D. SI-5掘方(東より) E. SI-5掘方東西土層(南東より) F. SI-5掘方(南より) G. SI-5カマド掘方南北土層(東より) H. SI-5カマド掘方東西土層(南より)
- 図版9 A. SI-5完掘カマド(南より) B. SI-5カマド掘方(南より) C. SI-5鉄製品出土状態(南より) D. SI-5遺物出土状態(南より) E. SI-8東西土層(南東より) F. SI-8東西土層(南より) G. SI-8完掘(東より) H. SI-8完掘(北東より)
- 図版10 A. SI-8掘方(東より) B. SI-8掘方(北より) C. SI-8掘方東西土層(南西より) D. SI-8掘方東西土層(南より) E. SI-8カマド南北土層(東より) F. SI-8カマド東西土層(南より) G. SI-8カマド完掘(南より) H. SI-8カマド掘方完掘(南より)
- 図版11 A. SI-8 P1東西土層(北より) B. SI-8 P1完掘(南より) C. SI-8 P9工具裏(北東より) D. 同前近接(北東より) E. SI-8遺物出土状態(東より) F. SI-8遺物出土状態(南より) G. SI-8遺物出土状態(南より) H. SI-8カマド遺物出土状態(南より)
- 図版12 A. SI-9南北土層(東より) B. 同前北側近接(東より) C. SI-9完掘(西より) D. SI-9完掘(南より) E. SI-9掘方(南より) F. SI-9掘方(西より) G. SI-9掘方(東より) H. SI-9 P4東西土層(南より)
- 図版13 A. SI-9カマド完掘(南より) B. SI-9カマド掘方(南より) C. SI-9炭化材出土状態(南西より) D. SI-9炭化材出土状態(南より) E. SI-9白玉出土状態(北西より) F. SI-9遺物出土状態(南より) G. SI-9近接(南より) H. 同前(南西より)
- 図版14 A. 3区北東小穴群(南より) B. SB-1完掘(西より) C. SB-1完掘(南より) D. SB-2完掘(西より) E. SB-2 P1完掘(南より) F. P11東西土層(北より) G. P20東西土層(南より) H. P20完掘(北より)
- 図版15 A. SK-1完掘(北より) B. SK-2土層完掘(東より) C. SD-1~3・5全景(北より) D. SD-1・2土層(南より) E. SD-2遺物出土状態(西より) F. SD-6全景(東より) G. SD-6東西土層(西より) H. SD-6遺物出土状態(西より)
- 図版16 A. SD-3東西土層(南より) B. SD-5東西土層(南より) C. C. 1区基本土層(北より) D. C. 2区基本土層(南より) E. C. 3区基本土層(南より) F. 調査状況(北西より) G. 市文化財審議委員による現地指導 H. 同前
- 図版17 SI-1~3出土遺物 図版21 SI-5・8出土遺物
- 図版18 SI-3出土遺物 図版22 SI-9出土遺物
- 図版19 SI-3・4出土遺物 図版23 SD-6、調査区内出土遺物
- 図版20 SI-4出土遺物

I はしがき

1. 調査に至る経緯 (第1図)

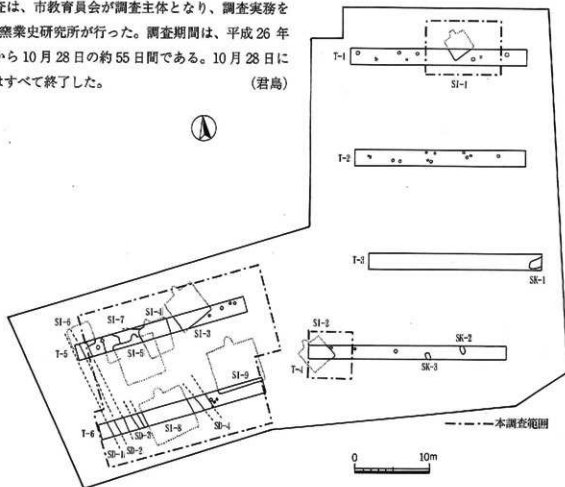
平成26年5月28日付で、今井実氏より茂原町898番2,898番5,909番1,909番3の茂原北原遺跡(県番号4308)内で集合住宅建築に伴い、文化財保護法93条の届出が提出された。同日付で市教育委員会文化課から県教育委員会文化財課(以下県文化財課)へ進達し、これに対し、県文化財課より確認調査の必要があるとの指示が6月6日付であったため、事業者代理人である大東建託(株)と協議し、確認調査を実施することになった。

確認調査は、7月2日、7月3日に実施した。調査の方法は、開発区域内の建物等により掘削が及ぶ範囲に幅2mの試掘溝を6本設定し(T-1～T-6)、深さ40～80cmの表土部分を重機により掘り下げ、遺構の確認を行った。その結果、T-1で堅穴住居跡1軒、T-4で堅穴住居跡1軒、T-5より堅穴住居跡5軒、溝2条、土坑1基、T-6より堅穴住居跡2軒、溝4条を確認した。

この調査結果を踏まえて、今井氏並びに代理人である大東建託(株)と協議を行い、その後の対応を協議した結果、遺構が保護出来ない部分の600㎡分を本調査することとなった。

その後、調査の担当者が(株)日本窯業史研究所と決まり、8月25日付で事業者である今井氏と宇都宮市教育委員会教育長水越久夫の間で調査に関する覚書を交わした。

発掘調査は、市教育委員会が調査主体となり、調査実務を(株)日本窯業史研究所が行った。調査期間は、平成26年9月4日から10月28日の約55日間である。10月28日に野外調査はすべて終了した。(君島)



第1図 試掘調査図

2. 調査の経過と概要 (第2回)

調査は開発予定地約2,100㎡のうち、建物及び雨水浸透槽の建設により遺構に影響が及ぶと判断された約600㎡に対して実施した。調査区は3ヶ所に分散することから、北東が1区、南が2区、南西部を3区と名称した。

9月5日に調査前写真の撮影及び調査区の設定を行い、近隣挨拶を済ませます。

9月8日より重機、仮設の搬入、表土除去作業に着手。道路・民家に面する部分は安全対策を行う。翌9日より作業員が入り、人力による遺構確認作業を行った。9月13日GPSを使用して測量基準点の設定を行う。

1・2区は試掘の想定通り各1軒づつ竪穴住居跡が確認された。3区は最も広い調査区で7軒程の竪穴住居跡と土坑・小穴、溝跡の存在が推定されていた。古代の遺構の上に中世の溝、近・現代の多数の溝跡が確認された。近・現代の溝跡については、古代の遺構との重複が無い場合は調査対象から除外することとなった。調査区の南西部では数次の掘り直しによって上幅2m、深さ1.6m程の南北溝(SD-1・2)があり、断面がV字状で埋積土の締りが強いことから当初は遺構かと思われたが底面近くより、第2次世界大戦当時の代用品の陶器の湯たんぽが出土し調査対象から除外した。この東側にもこれらと並行する南北溝(SD-3・5)が確認されたが、これらも断面形、埋積土の状況が前2者と類似しており同様のものと判断された。調査区の中程、SI-8と9の間にも南北溝(SD-4)と見られるものが確認されていたが、調査の進捗に伴いSI-8の規模が大きくなりその埋積土の一部であることが判明した。また、これらの溝と直交するように延びる東西溝(SD-6)が確認され、埋積土より中世土器皿、炆器鉢が出土し中世の溝跡と判断した。

3区では竪穴住居跡は当初7軒と推定されたが、一辺7～8.3mの大型住居跡3軒と一辺4～5m程の一般規模の住居跡が2軒の計5軒となった。したがって1・2区と合わせ計7軒を調査した。

今次調査で最大のSI-8は、南北(推定)8.3m、東西8.3mと大型であるが、床下の調査により数次の建て替え拡張の結果この規模になったことが判明した。この西に隣接するSI-9は7×7.3m、SI-8の北にあるSI-5も一辺8mと推定され、SI-8に先行する。調査区北寄りのSI-3・4はともにカマドの構築材として瓦を使用していたが、SI-3は女瓦のみ、4は男瓦のみを使用する。また、SI-4から出土の男瓦はいずれも文字瓦で、人名が銘記されていた。南南東約1kmの上神主・茂原官衙遺跡で出土している人名と合致する。

小穴類は約90基確認したが、掘立柱建物跡と推定し得るのは僅かに2棟であった。しかし、これも調査区の制約からそれぞれ、一列2間の柱並びを確認したに留まる。

出土遺物は、古墳時代末葉～平安時代初めの土器・須恵器を主体に、瓦、鉄製品(刀子、鏃、不明品)、石製品(白玉、砥石、紡錘車)、ガラス小玉等の他、縄文土器、石器、弥生土器、古式土器、中世土器、炆器などが出土した。

調査も終盤の10月21日、市文化財保護審議会竹澤 謙委員、橋本澄朗委員、赤石澤文化課長、岡地文化課長補佐、今平同課文化財保護グループ係長らの視察・指導があり、橋本委員より「官衙周辺集落を考える上で集落の始まりと終わりの時期を検討するように」との助言があった。

同日、ローリングタワーを利用して調査区全景写真を撮影する。その後、小穴の補足調査、記録補足を行い、同月28日に調査を終了した。さらに、埋戻し作業、仮設の撤収等を行い同月31日すべての野外作業を終了した。

整理・報告書作成作業は平成27年4月30日までに行い、報告書、記録類、出土遺物を市教委に移管し終了した。

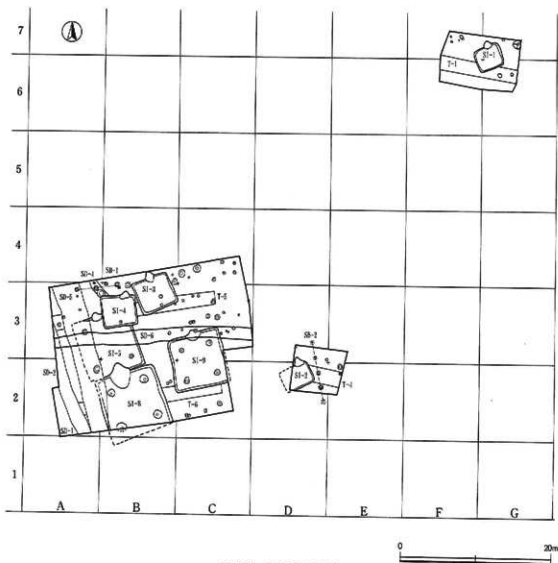
3. 調査の方法と基本層序 (第2・3図)

調査区は3ヶ所に分散していることから、北東部を1区(約65㎡)、南が2区(約40㎡)、南西を3区(約500㎡)と名称した。

調査は重機(バックホウ・0.45㎡)を使用し、厚さ40～80cmの表土(新・旧耕作土)を除去した後、人力により遺構確認作業を行った。

確認した遺構は、竪穴住居跡は十文字、土坑・小穴は半截、溝は横断による土層の観察・記録を基本とし、重複する遺構は適宜セクションベルトを追加した。その後、セクションベルトを除去して、完掘写真撮影・実測を行い、竪穴住居跡は床面を除いて掘方を追求した。再度写真撮影・実測を行う。この間、遺構の帰属時期を示すと思われる遺物及び特殊な遺物は出土位置の記録、出土状態の写真撮影を行って取り上げた。

調査の記録(実測)に際しては、公共座標(世界測地系=JGD2000及び日本平面直角座標=第Ⅷ系)を使用した10m方眼のグリッドを設置した。南西隅を基点(A1)とし、その座標値はX=52,830,000、Y=3,760,000、である。平面図は縮尺20分の1で全面を網羅した。計測にはトータルステーションを使用し、人手で図化した。土層図、断面図も縮尺20分の1を基本とするが、カマドは縮尺10分の1で実測した。



第2図 調査区配置図

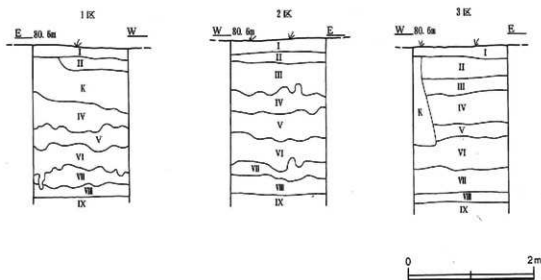
写真撮影は、35mm版の白黒・カールスライドフィルムを使用し、デジタルカメラで補足した。なお、撮影に際しては、三脚及び大型脚立を使用し、全景写真はローリングタワーを用いた。

調査対象地の現況はほぼ平坦な畑地となっているが、地山面は北から南西に向かって緩やかに下降していた。殊に3区の南側はかつての調査で低地であったことが確認されている。3区の南寄りでは新・旧2層の耕作土が認められ、かつては緩やかに南に向かって傾斜する畑地であったが、後に整地して現在のような平坦な畑地にしたと考えられる。

1～3区それぞれの柱状土層図を以下に示す。

基本土層 1～3区共通

- I. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒・塊 (1～15mm) 所々含む。締り並 (耕作土)
- II. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒 (1～3mm) 3%含む。締り並 (耕作土)
- III. 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒 (1～4mm) 1%、赤褐色バミス (1～2mm) 極微量含む。やや軟質で粘性ない。締り強い (ローム漸移層)
- IV. 黄褐色土 (10YR5/8) やや軟質で粘性ない。締り強い
- V. におい黄褐色土 (10YR5/3) におい黄橙色粒 (1～2mm) 微量含む。やや軟質で粘性弱い。締り強い (ブラックバンド漸移層)
- VI. 灰黄褐色土 (10YR4/2) におい黄橙色粒 (1～3mm) 微量含む。やや軟質で粘性弱い。締り強い (ブラックバンド)
- VII. 黄褐色土 (10YR5/6) におい黄橙色粒 (1～4mm)・灰黄褐色粒 (1～3mm) 1%含む。やや硬質で粘性ない。締り強い
- VIII. 灰黄褐色土 (10YR5/2) におい黄橙色粒 (1～4mm) 3%含む。硬質で粘性ない。締り極めて強い (小川スコリア層)
- IX. 明黄褐色土 (10YR6/8) 粘性ない。締り強い (鹿沼バミス層)



第3図 基本土層図

II 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境 (第4・5図)

遺跡は、栃木県宇都宮市茂原町字北原に所在する。宇都宮市の市街地の南方約8km、市域の南西端に位置し、南側1.5kmに上三川町、西側0.7kmに下野市と隣接する。

栃木県は関東平野の北端に位置し、東は茨城県、北が福島県、西は群馬県、南が埼玉県と隣接する。また、東・北・西の三方を山地に囲まれ、その中央部を南北方向に平地部が延びる。この平地部は鬼怒川、那珂川等の河川の流域となっており、宇都宮市の東寄りを鬼怒川が南流し、市域の中央部にはその水系の田川、西寄りには同じく姿川が南流している。これらの河川に沿って、低地と宇都宮・祇園原、田原・願成寺、岡本・宝積寺等の台地が南に向って細長く伸び、各台地は中・小の河川により樹枝状に開折されている。

本遺跡は、巨視的には田川低地と姿川低地に挟まれた、宇都宮・祇園原台地の東縁に位置するが、田川の旧河道を隔てた東方には島状の神主台地が所在している。今次調査区付近の標高は80m程で、これより南に向って緩やかに下降している。旧河道沿いの低地は水田として利用されており、畑地として利用されていた調査地との比高は約1.5mであった。

交通的には、JR東日本東北本線雀宮駅の南南東約2kmに位置し、西方約150mを東北本線及び東北新幹線、同約400mを国道4号線が南北に延び、さらに南方約1.2kmを北関東自動車道路が東西に、東方約3kmを新4号国道が南北に走り、北方約3kmを宇都宮環状線(国道121号線)が東西に通る、三者の交わる東北東方約3kmに上三川・宇都宮インターチェンジが設けられており、自動車交通の要衝である。

このような状況から、インターチェンジ周辺では大規模な土地区画整理事業が実施され、大型商業施設や各種事業所が進出し、住宅街も形成されている。さらに、南方約1kmには宇都宮市と近隣の自治体が合同で建設した大規模ゴミ処置施設クリーンパーク茂原が所在するなど、のどかな田園地帯も様変わりしている。

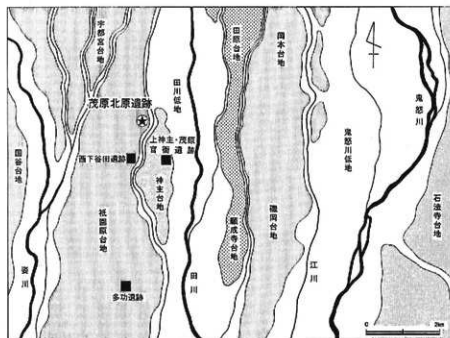
2. 歴史的環境 (第4・5図、第1表)

本遺跡の所在する宇都宮市南部から南隣りの上三川町、南方の小山市、西隣りの壬生町、南西の下野市・栃木市にかけての地域は県内でも指折りの遺跡密集地域である。

また、近年は前述の如き交通網の整備や土地区画整理事業、民間の宅地開発などの大規模開発に伴う発掘調査が実施され、その実態が明らかにされつつある。

尚、田川低地の両岸に所在する近隣の遺跡を概観すると、その殆んどが古墳(群)もしくは古墳時代～平安時代の集落跡であり、古墳時代以降この低地を生産基盤とする開発が急激に進行したものと推察される。

古墳では、南東約500mの茂原古墳群内に前期の前方後方墳である権現山古墳群(32)、大日塚古墳(33)、愛宕塚古墳(35)が所在し、全長36～63mで当地の盟主的存在と見られている。また、東北東約2kmには、該期としては県内最大級の中期的大型前方後円墳の笹塚古墳(25)が所在する。二重周溝をもち全長約100mで首長墓と考えられている。この西方4kmにはその後継と見られる全長96mの前方後円墳の塚山古墳(図外)が所在する。後期の前方後円墳は小山市の摩利支天塚や琵琶塚古墳、壬生町の吾妻古墳など小山市・下野市から壬生町など県南地域へと分布が変わる。本遺跡周辺には中・小規模の前方後円墳、円墳、方墳などによって形成される古墳群が各所に点在するようになる。



第4図 遺跡付近の地形区分

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	県道番号	市番号	遺跡名	種別	時期等
1	4308	243	茂原北原遺跡	集落跡	奈良時代
2	4307	234	多功神塚古墳群	古墳群	古墳時代
3	4306	233	宇都宮機器南遺跡	集落跡	古墳時代
4	4305	221	牛塚古墳	古墳	古墳時代(前方後円墳) 中期末～後期初(潭滅)
5	4304	214	牛塚東遺跡	集落跡	奈良時代
6	4303	213	雀宮駅東遺跡	集落跡	奈良時代
7	4301	212	雀宮東前遺跡	集落跡	奈良時代
8	4300	209	糠女塚古墳	古墳	古墳時代
9	4299	208	十里木古墳	古墳	古墳時代
10	4194	403	留西南遺跡	集落跡	古墳～奈良時代
11	4192	207	留西遺跡	集落跡	古墳時代
12	3386	406	砂田遺跡	集落跡	古墳～奈良時代
13	4356	447	砂田能沼遺跡	集落跡	古墳～平安時代
14	4355	448	中島塚遺跡	集落跡	古墳～平安時代
15	4357	210	赤沢高塚群	高塚	江戸時代
16	4359	211	平内遺跡	集落跡	奈良時代
17	4358	451	立野遺跡	集落跡	古墳～平安時代・中世
18	4360	449	磯岡遺跡	集落跡	古墳～平安時代
19	4361	450	野平塚古墳群	古墳群	古墳時代(前方後円墳他)
20	4372	222	桜柳荷古墳	古墳	古墳時代
21	4371	455	権現山遺跡	集落跡	古墳～平安時代
22	4373	223	杉村遺跡	集落跡	奈良・江戸時代
23	4375	456	原遺跡	集落跡	古墳～平安時代
24	4374	224	双子塚遺跡	古墳	古墳時代(前方後円墳他)
25	4377	235	笹塚古墳	古墳	県指定史跡、古墳時代中期(前方後円墳)
26	4378	240	鶴舞塚古墳	古墳	古墳時代中期、円墳(潭滅)
27	4380	239	松の塚古墳	古墳	古墳時代
28	4376	237	原古墳群	古墳群	古墳時代
29	4379	238	権現塚古墳群	古墳群	古墳時代
30	4381	236	東塚古墳群	古墳群	古墳時代
31	4309	241	権現山北遺跡	集落跡	旧石部・養生・古墳～平安時代
32	4310	242	権現山古墳群	古墳群	古墳時代前期(前方後円墳他)
33	4314	246	大日塚古墳	古墳	古墳時代前期(前方後円墳)
34	4313	248	愛宕塚東遺跡	集落跡	古墳～奈良時代
35	4315	247	愛宕塚古墳群	古墳群	古墳時代前期(前方後円墳他)
36	4319	251	江淵遺跡	集落跡	奈良時代
37	4318	250	小藪遺跡	集落跡	奈良時代
38	4321	452	上神主・茂原官衙遺跡	官衙跡	国指定史跡、古墳～奈良時代
39	4320	468	茂原向原遺跡	集落跡	奈良・平安時代
40	4317	467	西下谷田遺跡	官衙跡	古墳～奈良時代
41	4316	249	前畑遺跡	集落跡	奈良時代
42	4312	245	西の前遺跡	集落跡	奈良時代



第5図 遺跡の位置と周辺遺跡 (1 : 25,000)

該期の集落跡は砂田遺跡(12)、砂田姥沼遺跡(13)、中島位塚遺跡(14)、立野遺跡(17)、磯岡遺跡(18)、権現山遺跡(21)など大規模な遺跡が田川低地左岸に集中して見られ、これらは平安時代まで継続する。

また、古墳時代末葉から平安時代にかけての集落跡はこれらの東方の岡本・磯岡台地上に展開する状況が見られる。

これに対し本遺跡の立地する田川低地の右岸では、北方の雀宮東浦遺跡(7)、雀宮駅東遺跡(6)、牛塚東遺跡(5)、南方の西の前遺跡(42)、前畑遺跡(41)、小壺遺跡(37)、江連遺跡(36)、愛宕塚東遺跡(34)など古墳時代末葉から奈良時代になって形成されたと推察される遺跡が集中している。

律令制下における当地は、下野国河内郡に属していた。下野国は東山道に属し、『延喜式』では9郡を管する上国であった。当国の中心となる下野国府は西隣りの都賀郡(現栃木市)に所在し、国分二寺も同郡(現下野市)に設けられていた。『和名類聚抄』によれば河内郡は11郷を管する中郡であるが、古代東国仏教の要として日本三戒壇の一つが設置された下野業師寺(現下野市)が建立されていた。国府・国分寺の設置に際しては、中央政権との関係によっては旧勢力の根拠地を避けるとの見方も否めないが、いずれにせよ都賀・河内の両郡が古代下野国の中心地であったであろうことは疑う余地が無いであろう。

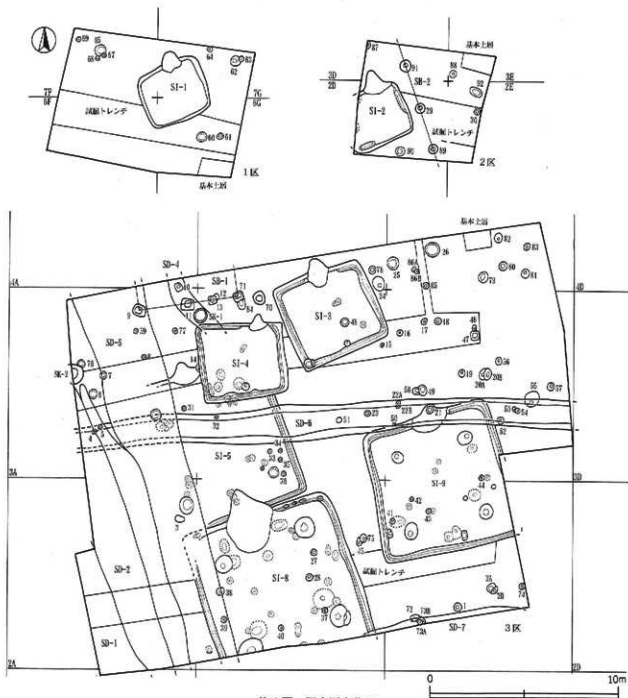
なお、当河内郡内には官衙跡及びその要素の高い遺跡が西下谷田遺跡(40)、上神主・茂原官衙遺跡(38)、多功遺跡(図外)の3ヶ所知られる。本遺跡の南南東約1km、宇都宮市と上三川町に跨って所在する国指定史跡の「上神主・茂原官衙遺跡」は掘立柱建物の政庁と瓦葺の正倉を含む倉院を備えた河内郡衙(家)と推定されている。しかし、調査によって8世紀前半で政庁は消滅し、倉院のみとなることが確認された。その後、南方約4km、上三川町に所在する多功遺跡に政庁が移ったと推定されているが、多功遺跡では掘立柱建物と礎石立建物の倉庫群のみで未だに政庁は確認されておらず疑問を残す。さらに、本遺跡の南約1kmの西下谷田遺跡では前二者より先行することが調査で確認されており、初期官衙(評家)もしくは豪族の居宅と見られるもので、この遺跡から上神主・茂原官衙遺跡への移行が推定されている。

このような環境における本遺跡及び田川低地右岸の集落跡は、官衙周辺集落として律令期に入って発生したものと推察される。今次調査では上神主・茂原官衙遺跡の正倉(SB-1)に葺かれていたと思われる瓦がカマド構築材として使用されており密接な関係が感じられる。

なお、中世の遺跡については明確に難しいが、本遺跡の過去の調査や今次調査において多少の遺構・遺物が確認されており該期の土地利用の存在が知られる。

III 遺構と遺物 (第6図)

今次調査で確認した遺構は、古代の竪穴住居跡7軒、掘立建物跡2棟、土坑2基、小穴約90基、中世の溝跡1条、近代の溝跡5条である。なお、前述の如く調査区が3ヶ所に分かれており、北東の1区では竪穴住居跡1軒 (SI-1) と小穴9基、南の2区では竪穴住居跡1軒 (SI-2)、掘立建物跡1棟 (SB-2)、小穴8基、他はすべて南西の3区で確認された。遺物は、古代の土師器、須恵器が主体で、屋瓦、鉄製品 (刀子、鋏、不明品)、石製品 (白玉、砥石、紡錘車)、ガラス小玉などがある。土師器・須恵器には「+」、「里」、「王 or 玉」などの墨書が銘記されたものもあり、カマド構築材の男瓦4点に人名と考えられる文字が記されていた。また、畿内産の土師器や在地産の土師器蓋、須恵器の高盤なども見られた。



第6図 調査区全体図

1. 竪穴住居跡

SI-1

遺構 (第7・8図、図版2E～3D)

調査区北東の1区中程、F6・F7・G6Grに跨って所在する。最も近いのは南西約45m、2区のSI-2である。重複関係は認められなかったが、埋積土上位より後世の土師器坏が完形で出土しており、何らかの遺構が上に存在した可能性も否めない。

平面形は、東西3.6m、南北3mの東西に幾分長い隅丸方形である。北辺の中央やや東寄りにカマドが築かれ、主軸方位はN-25°-Wを示す。

壁は現存高65～70cmで、ほぼ直立する。壁下に壁溝は確認出来なかった。

床面はローム層中にあり、粗掘りの後ローム主体の土で整地し、平坦で堅く締っていた。柱穴、貯蔵穴等は認められなかった。南壁際の小穴(P1)は出入口の施設と考えられる。

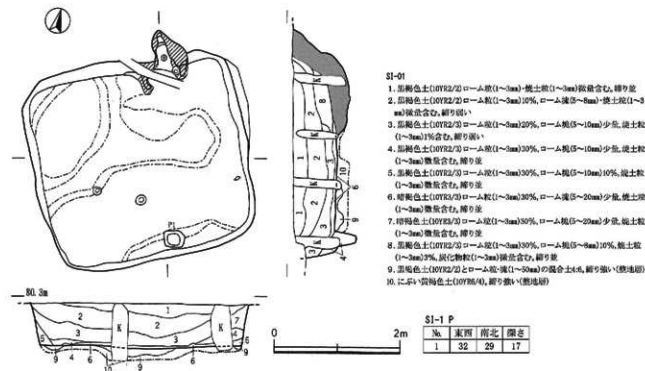
カマドは壁を幅60cm、奥行45cmの三角形に掘り込み、白色粘土で築かれていた。住居の廃絶に際して破壊されたものか支脚は遺存しなかった。

遺物は床面よりほぼ完形の土師器坏が出土の他、埋積土上位より後世の土師器坏が出土している。

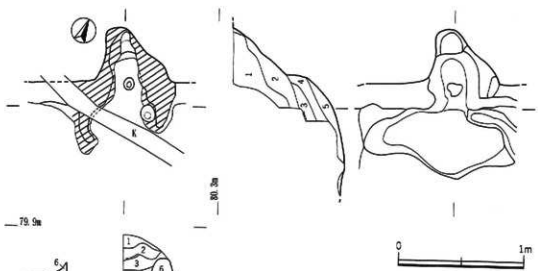
埋積土は7層に分けられ、自然埋没と考えられる。

遺物 (第9図、第2表、図版17)

遺物は土師器坏(1～5)、土師器甕(6・7)が出土した。5はロクロ整形で内面黒色処理が施された後世のもので、確認面付近より出土した。カマド出土の土師器甕(7)は先行する時期のものと思われる。(柏崎)

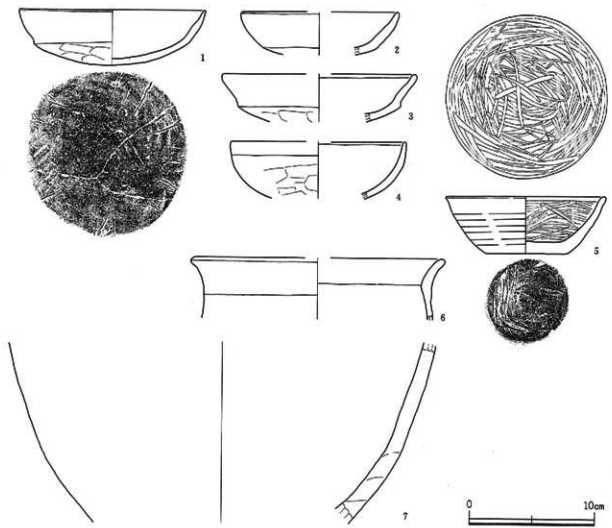


第7図 SI-1



- SI-1カマド
1. 黒褐色土(10YR5/2)ローム粒(1~4mm)10%、粘土粒(1~3mm)1%含む、締り弱。
 2. 暗褐色土(10YR3/2)ローム粒(1~4mm)5%、粘土粒(1~3mm)微量含む、締り弱。
 3. 暗赤褐色土(2.5YR5/0)ローム粒(1~4mm)10%含む、締り強。
 4. 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒(1~4mm)20%、粘土粒(1~3mm)微量含む、締り弱。
 5. 褐色土(10YR2/1)ローム粒(1~4mm)・粘土粒(1~3mm)10%含む、締り強(硬地境)。
 6. 黒褐色土(10YR3/2)ローム粒(1~4mm)30%、粘土粒(1~3mm)1%含む、締り強。

第8図 SI-1カマド



第9図 SI-1出土遺物

第2表 SI-1出土遺物観察表

() 推定値 [] 現存値

No.	類別 器種	大きさ (cm) 口径・器高・底径	遺存率	形状・手法等	胎土、焼成、色調	備考
1-1	土師器 坏	口径 14.8 器高 4.4 底径 —	100%	口縁部横ナデ、体・底部ヘラ削り、 内面ナデ、ウルクシ処理	胎土 角閃石 焼成 普通 色調 にぶい黄澄 10YR7/3	No.2
1-2	土師器 坏	口径 (12.5) 器高 [3.4] 底径 —	破片	口縁部横ナデ、体部ヘラ削り、内面 ナデ、ウルクシ処理	胎土 角閃石 焼成 普通 色調 にぶい黄 7.5YR7/4	No.1
1-3	土師器 坏	口径 (15.4) 器高 [3.8] 底径 —	破片	口縁部横ナデ、体部ヘラ削り、内面 ナデ	胎土 角閃石、1～2mm燧 二次焼熱 色調 にぶい黄澄 10YR7/4	カマドNo.2 ウルクシ消失
1-4	土師器 坏	口径 (13.9) 器高 4.5 底径 —	破片	口縁部横ナデ、体部ヘラ削り、内面 ヘラナデ	胎土 赤褐色粒 二次焼熱 色調 灰黄褐 10YR5/2	埋積土2区
1-5	土師器 坏	口径 12.6 器高 4.6 底径 6.7	100%	ロクロ成形、底部ヘラ削り一部ミガ キ、内面ミガキ後黒色処理	胎土 石英 良好 色調 にぶい黄澄 10YR4/3	No.3 外面に墨の痕跡
1-6	土師器 甕	口径 (19.8) 器高 [4.8] 底径 —	破片	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り、 内面ヘラナデ	胎土 白色粒、金雲母 焼成 普通 色調 黒褐 10YR3/1	
1-7	土師器 甕	口径 — 器高 — 底径 —	破片	外面ミガキ、内面ヘラナデ	胎土 石英、1～2mm燧 焼成 普通 色調 黄褐 10YR5/6	カマドNo.1

SI-2

遺構 (第10図、図版3E～4F)

調査区の南の2区西端、D2Grに所在し、西側の一部は調査区外に延びる。西方約8mに3区のSI-9が隣接する。重複関係は認められなかった。

平面形・規模は、前記の状況から明確にし難いが、完存する東辺の南北長は2.8m、現存東西長は南辺で3.3m、東西に幾分長い隅丸方形と推定される。北辺の東端にカマドが築かれており、カマドを通る主軸方位はN-23°-Wを示す。

壁は現存高32cmで、ほぼ直立する。壁下に壁溝が部分的に認められた。東辺の中央やや北寄り、南辺の西寄りに設けられ、幅15～20cm、深さ7cm程であった。

床面はローム層中にあり、粗掘りの後ローム主体の土で整地したもので、平坦で堅く締っていた。柱穴や出入口施設、貯蔵穴などは確認されなかった。

カマドは壁を幅90cm、奥行100cmの三角形に掘り込み、白色粘土で築かれていた。住居跡の廃絶に際して破壊されたものか支脚等は認められなかった。

埋積土は6層に分けられ、自然埋没と考えられる。

遺物はカマド周辺より土師器坏、須恵器の坏、高台坏、高盤などが出土した。

遺物 (第11図、第3表、図版17)

土師器坏(1)、須恵器坏(2・3)、高台坏(4)、高盤(5)、土師器甕(6)、女瓦片(7)などがある。土師器坏はほぼ完形で底部外面に「+」の墨書が銘記されていた。高盤は約2分の1が遺存し、台脚部に長方形の透かし孔が穿たれている。

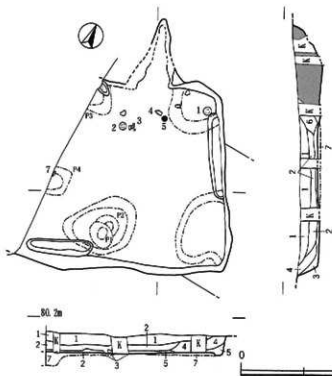
(柏崎)

SI-3

遺構 (第12・13図、図版4G～6B)

調査区の南西の3区北寄り、B3Grに所在する。西にSI-4、南約4mにSI-9が隣接する。重複関係は認められない。

平面形・規模は、東西長5m、南北長4.5mのほぼ方形。北辺の中程にカマドが築かれ、カマドを通る主軸

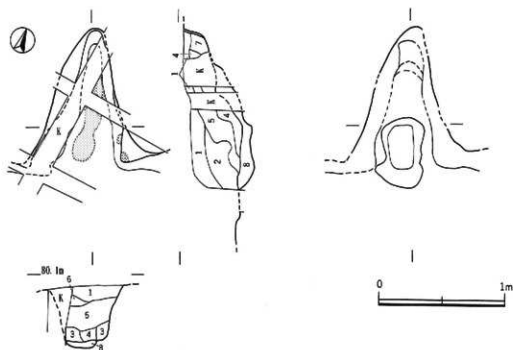


SI-02

1. 暗褐色土(0YR3/2)ローム粒(1~3mm)30%含む、埴り土
2. 暗褐色土(0YR3/2)ローム粒(1~3mm)30%、ローム塊(5~8mm)・炭土粒(1~3mm)数粒含む、埴り土
3. 濃い黄褐色土(0YR4/2)と暗褐色土(0YR3/2)の混合土5%、埴り土
4. 黒褐色土(0YR2/2)ローム粒(1~3mm)30%、ローム塊(5~10mm)少量、炭土粒(1~3mm)数粒含む、埴り土
5. 黒褐色土(0YR2/2)ローム粒(1~3mm)30%、ローム塊(5~15mm)少量含む、埴り土
6. 暗褐色土(0YR3/2)ローム粒(1~3mm)30%、ローム塊(5~8mm)数粒、炭土粒(1~2mm)1%、炭化物粒(1~5mm)数粒含む、埴り土
7. 濃い黄褐色土(0YR4/2)、埴り強い(形不詳)

SI-2 P

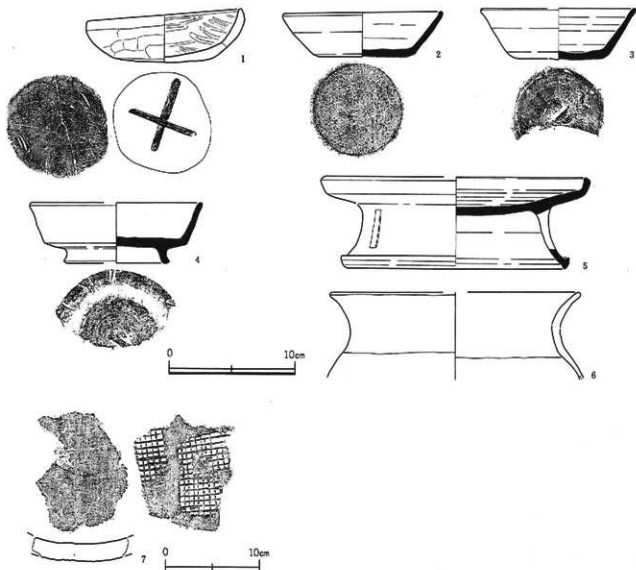
	№	東西	南北	高さ
1	32	45	72	
2	35	(17)	32	
3	(35)	(48)	10	
4	(30)	46	19	



SI-2カマド

1. 黒褐色土(0YR2/2)ローム粒(1~4mm)3%、ローム塊(5~10mm)・炭土粒(1~4mm)1%含む、埴り土
2. 黒褐色土(0YR2/2)ローム粒(1~4mm)3%、ローム塊(5~20mm)1%、炭土粒(1~4mm)10%含む、埴り土
3. 黒色土(0YR2/1)ローム粒(1~4mm)3%、ローム塊(5~20mm)1%、炭土粒(1~4mm)10%含む、埴り土
4. 明暗褐色土(2.5YR5/0)暗褐色土(0YR2/2)20%混入、埴り土
5. 暗褐色土(0YR3/2)ローム粒(1~4mm)3%、ローム塊(5~20mm)1%含む、埴り強い
6. 暗褐色土(0YR3/2)ローム粒(1~4mm)20%、ローム塊(5~8mm)10%含む、埴り土
7. 暗褐色土(0YR3/2)ローム粒(1~4mm)・炭化物粒(1~4mm)数粒、炭土粒(1~4mm)1%含む、埴り土
8. 暗褐色土(0YR3/2)とローム粒・塊(1~30mm)の混合土5%、埴り土

第10図 SI-2・カマド



第11図 SI-2出土遺物

第3表 SI-2出土遺物観察表

() 推定値 [] 現存値

No	種別 器種	大きさ (cm) 口径・器高・底径	取付度	形状・手法等	胎土 焼成、色調	備考
2-1	土師器 杯	口径 12.4 器高 4.3 底径 7.9	100%	口縁部横ナデ、体・底部ヘラ削り、 内面ミガキ	胎土 石英、角閃石 焼成 普通 色調 明赤褐 2.5YR5/6	No.1 底部に「一」墨書
2-2	須恵器 杯	口径 12.6 器高 3.7 底径 7.2	100%	粘土粘着き上げ後ロクロ整形、底部 回転ヘラ削り	胎土 白色砂多量 焼成 良好 色調 黄灰 2.5Y5/1	No.4
2-3	須恵器 杯	口径 (12.3) 器高 4.1 底径 (7.4)	40%	ロクロ整形、底部ヘラ削り	胎土 白色斑 焼成 普通 色調 黄灰 10YR5/1	No.5
2-4	須恵器 高台杯	口径 (13.5) 器高 4.8 底径 (8.4)	45%	ロクロ整形、底部回転ヘラ削り	胎土 長石、3mm礫 焼成 良好 色調 黒 N2/0	No.7
2-5	須恵器 盤	口径 (21.0) 器高 7.3 底径 17.4	50%	ロクロ整形、盤底面回転ヘラ削り、 長方形の透かし	胎土 白色粒、黒色粒 焼成 良好 色調 黄灰 10YR5/1	No.8
2-6	土師器 甕	口径 (19.8) 器高 [6.8] 底径 —	破片	口縁部横ナデ、体部外面横方向のヘ ラ削り、内面ヘラナデ	胎土 石英、細砂粒 焼成 良好 色調 明赤褐 5YR5/6	須原土2区 武蔵型
2-7	瓦 女瓦	全長 幅 高さ — — —	破片	片面格子タタキ、側面有目	胎土 石英、白色粒、2~3mm礫 焼成 良好 色調 黄灰 2.5Y5/1	No.2

方位はN-28°-Wを示す。

壁は現存高55～60cmでほぼ直立する。壁下には幅18～22cm、深さ10cmの溝が設けられており、カマド部分を除き圍繞する。

床面はローム層中にあり、粗掘りの後ローム主体の土で整地されたもので、平坦で堅く締っていた。柱穴・貯蔵穴などは認められなかったが、南壁際の中程に出入口施設と見られる径40cm、深さ20cmの小穴(P1)を確認した。

カマドは壁を幅110cm、奥行60cmの半円形に掘り込み、白色粘土で築かれていた。また、構築材として女瓦(12～14)が使用されており、12はほぼ完形に復元できた。凸面が格子叩きのものが主体で縄叩きのものも少量含まれる。住居の廃絶に際して破壊された為か、支脚は残されておらず、焚口部の遺存状態も悪い。

埋積土は7層に分けられ、自然埋没と考えられる。

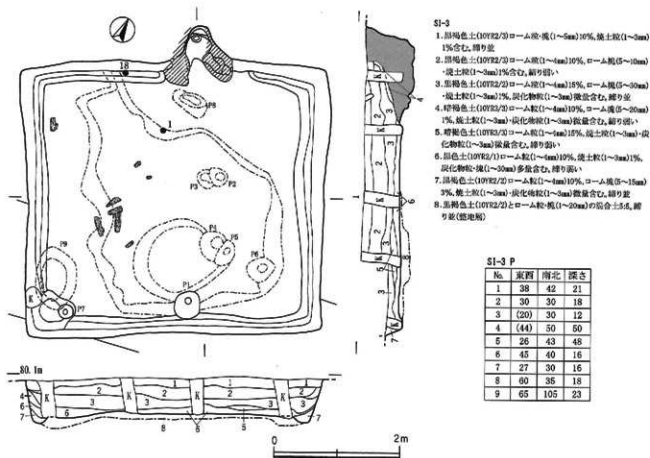
本跡は、床面の所々に炭化材及び焼土の遺存が認められ、火災住居跡と考えられる。

遺物は土師器杯・甕の他須恵器蓋・杯・高台杯・壺、カマド構築材の女瓦、石製品(砥石、紡錘車)、鉄製品(刀子、鏃)などがある。

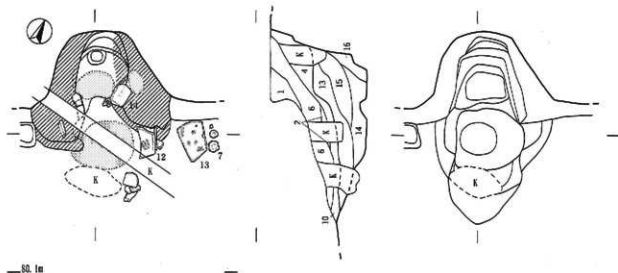
遺物(第14～16図、第4・5表、図版17・18)

遺物は前述の如く、土師器杯(1)、須恵器杯(2～5)、蓋(6)、高台杯(7)、壺(10)、土師器甕(8・9)、石製品(砥石=11、紡錘車=15)、女瓦(12～14)、鉄製品(鏃=16・17、刀子=18～21)などがある。

(柏崎)



第12図 SI-3



SI-3カマド

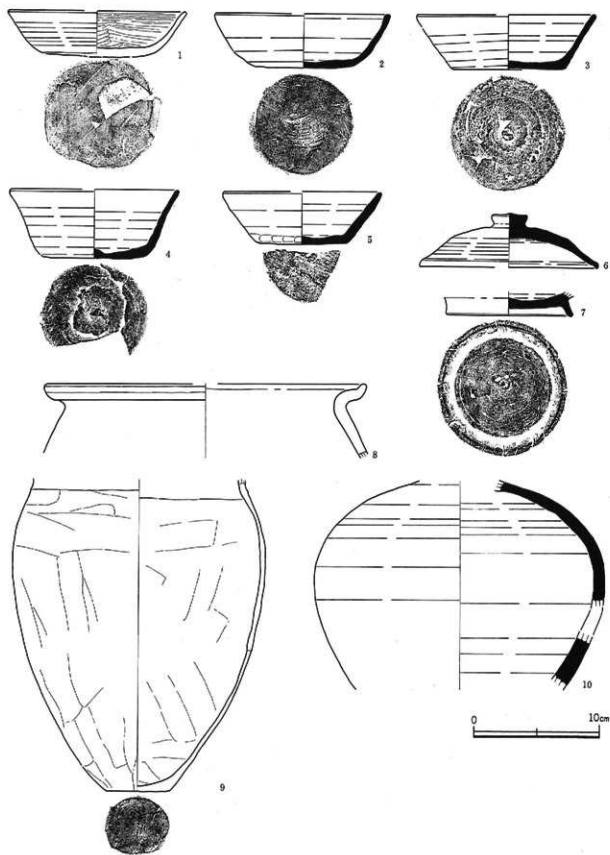
1. 赤褐色土(SYR4/1)ローム殻(1~3mm)20%, 焦土殻(1~3mm)5%, 炭化物殻(1~3mm)微量含む, 網り強い
2. 黒褐色土(SYR2/1)ローム殻(1~3mm)20%, 泥土殻(1~3mm)7%含む, 網り強い
3. 赤褐色土(SYR4/0)焼土層, 網り強い
4. 黒褐色土(SYR2/1)ローム殻(1~3mm)20%, 泥土殻(1~3mm)7%含む, 網り強い
5. 赤褐色土(SYR4/0)炭化物殻(1~3mm)微量含む, 焼土層, 網り強い
6. 濃い黄褐色土(OYR5/0)ローム殻(1~20mm)30%, 焼土殻(1~3mm)1%含む, 網り強い
7. 黒褐色土(OYR2/2)ローム殻(1~3mm)・焼土殻(1~3mm)1%含む, 網り強い
8. 赤褐色土(SYR4/0)泥土層, 網り強い(敷地層)
9. 暗褐色土(OYR3/3)ローム殻(1~20mm)10%, 焦土殻(1~5mm)9%, 炭化物殻(1~3mm)微量含む, 網り強い(敷地層)
10. 暗褐色土(OYR3/3)ローム殻(1~20mm)20%, 泥土殻(1~5mm)5%, 炭化物殻(1~3mm)微量含む, 網り強い(敷地層)
11. 黒褐色土(OYR2/2)ローム殻(1~3mm)10%, ローム殻(5~20mm)1%含む, 網り強い(敷地層)
12. 赤褐色土(OYR4/0)ローム殻(1~3mm)1%含む, 網り強い
13. 灰黄褐色土(OYR6/2)ローム殻(1~3mm)5%含む, 網り強い
- 7~9, 11, 12欠00

第13図 SI-3カマド

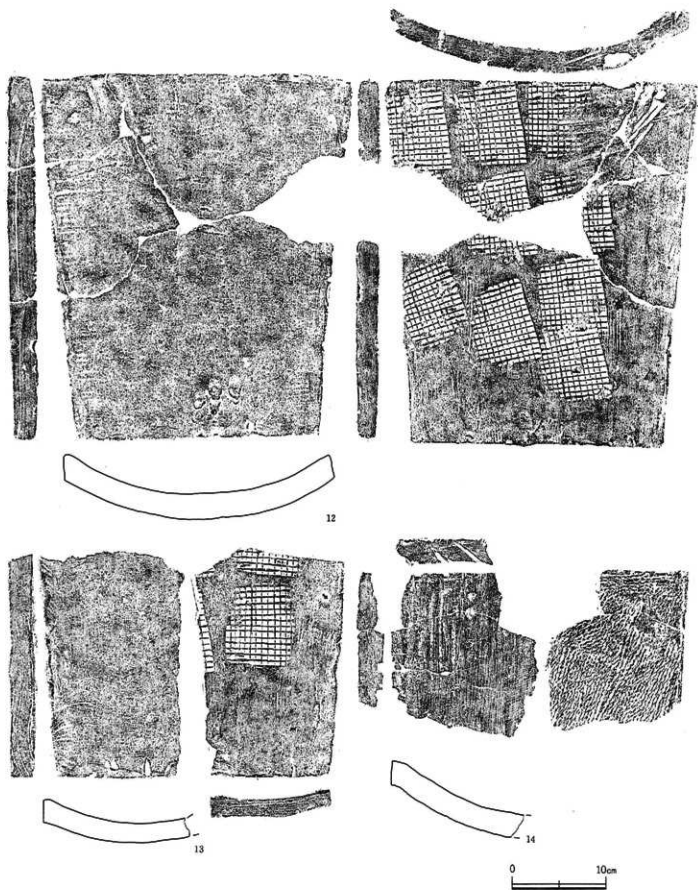
第4表 SI-3出土遺物観察表(1)

() 推定値 [] 現存値

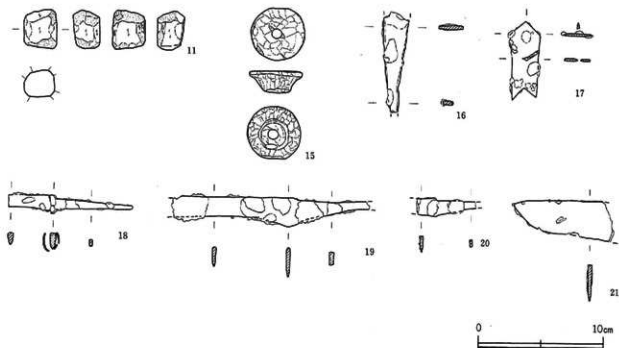
No.	類別 器種	大きさ(cm) 口径・器高・底径	遺存度	態形・手法等	胎土, 焼成, 色調	備考
3-1	土師器 坏	口径 (14.0) 器高 3.7 底径 8.6	40%	コクログ型, 底部ヘラ削り, 内面ミガキ	胎土 白色粒 焼成 良好 色調 明赤褐 2.5YR5/6	№6
3-2	須恵器 坏	口径 (13.75) 器高 4.3 底径 8.0	50%	コクログ型, 底部糸切り後外周ヘラ削り	胎土 灰色粒, 1~2mm粒, 白色粒 焼成 良好 色調 灰白 2.5Y8/1	Ⅱ層2, 体部外面に丸棒状の工具による筋が入る。ヘラ記号?
3-3	須恵器 坏	口径 (14.2) 器高 4.4 底径 9.0	50%	コクログ型, 底部ヘラ切り	胎土 白色粒, 4mm粒 焼成 良好 色調 灰黄 2.5Y6/2	Ⅱ層2区
3-4	須恵器 坏	口径 (13.4) 器高 5.5 底径 8.4	40%	コクログ型, 底部ヘラ切り	胎土 長石, 4mm粒 焼成 二次被熱 色調 橙 5Y6/8	Ⅱ層4区 内外面に一部スス付着
3-5	須恵器 坏	口径 (12.4) 器高 4.2 底径 (7.3)	30%	コクログ型, 体部下端手持ちへ	胎土 長石多量, 雲母 焼成 良好 色調 黄灰 2.5Y5/1	Ⅱ層4区
3-6	須恵器 蓋	口径 (14.2) 器高 4.3 底径 —	30%	コクログ型	胎土 長石 焼成 良好 色調 灰 N4/0	
3-7	須恵器 高台坏	口径 — 器高 [1.9] 底径 10.2	—	コクログ型, 底部回転ヘラ削り, 付高台	胎土 白色粒多, 4mm粒 焼成 良好 色調 暗灰黄 2.5Y5/2	カマド4 高台内壁付着
3-8	土師器 罎	口径 (25.3) 器高 [5.9] 底径 —	—	口縁薄嵌ナデ	胎土 長石多量, 雲母 焼成 普通 色調 濃い黄橙 10YR6/4	Ⅱ層3区 下野型機
3-9	土師器 罎	口径 — 器高 [24.5] 底径 8.1	40%	口縁薄嵌ナデ, 体部外面上位傾位のヘラ削り, 下位傾位のヘラ削り, 底部ヘラ削り, 内面上位傾位のヘラ削り, 下位斜めのナデ	胎土 石質, 雲母 焼成 普通 色調 濃い赤褐 SYR4/4	Ⅱ層2区 武蔵型罎, 外面にスス付着
3-10	須恵器 罎	口径 — 器高 — 底径 —	—	体部片 コクログ型	胎土 白色粒 焼成 良好 色調 灰白 2.5Y7/1	Ⅱ層2区



第14圖 SI-3出土遺物(1)



第15図 SI-3出土遺物(2)



第16図 SI-3出土遺物(3)

第5表 SI-3出土遺物観察表(2)

() 推定値 [] 現存数

No.	種別 器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	遺存度	整形・手法等	備考		
3-11	石製品 砥石	3.1	2.6	2.1	24.1	凝灰岩	90%	側面の7面を磨る	埋蔵土1区		
No.	種別 器種	全長(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	遺存度	整形・手法等			備考		
3-12	瓦 瓦瓦	38.2	31.4	25.1	95%	凹面有目痕、ナデ、凸面格子タタキ(押型)			カマド11		
3-13	瓦 瓦瓦	—	—	—	—	凹面有目痕、ナデ、凸面格子タタキ(押型)			カマド		
3-14	瓦 瓦瓦	—	—	—	—	凸面網タタキ、凹面有目、小口に乾燥時の棒状の圧痕が認められる			カマド2		
No.	種別 器種	上面径 (mm)	下面径 (mm)	厚さ(mm)	上孔(mm)	下孔(mm)	重さ(g)	石質	遺存度	整形・手法等	備考
3-15	石製品 紡錘車	43.3×11.9	23.16×22.75	16.6	7.45×7.3	7.18×7.38	36.4	滑石	100%	上面と側面に調整痕を残す	No.1
No.	種別 器種	全長(mm)	最幅(mm)	最厚(mm)	孔径(mm)	遺存度	整形・手法等			備考	
3-16	鉄製品 鏝	[79]	20	4	—	—				カマド1 方眼洋筒式	
3-17	鉄製品 鏝	62	25	2	2.5	100%	皮紐遺存			No.2 無蓋式	
No.	種別 器種	全長(mm)	刃部幅 (mm)	茎幅(mm)	刃厚(mm)	茎厚(mm)	遺存度	整形・手法等			備考
3-18	鉄製品 刀子	[100]	10	6	4.5	4	刃部欠損			No.3	
3-19	鉄製品 刀子	[159]	16	10	3	4	—			No.4	
3-20	鉄製品 刀子	[47]	13	5.5	4.5	2	—			埋蔵土3区	
No.	種別 器種	全長(mm)	刃部幅 (mm)	刃厚(mm)	遺存度	整形・手法等			備考		
3-21	鉄製品 刀子	[78]	29	3	—	刃部で折れ曲がる					

SI-4

遺構 (第17・18図、図版6C～7H)

調査区の南西の3区北西部に所在する。東にSI-3が接するように隣接する。南はSI-5と重複しこれを切る。北約1mにSB-1が隣接するが、新・旧関係は明確にし難い。

平面形・規模は、東西長5m、南北長4.3mの方形と考えられる。北辺の東寄りにカマドが築かれており、カマドを通る主軸方位はN-6°-Wを示す。

壁は現存高60～70cmでほぼ直立する。壁下には幅15～20cm、深さ7～10cm程の壁溝が設けられており、カマド部分を除き圍繞する。

床面はローム層中にあり、粗掘りの後ローム主体の土で整地されたもので、平坦で堅く締っていた。

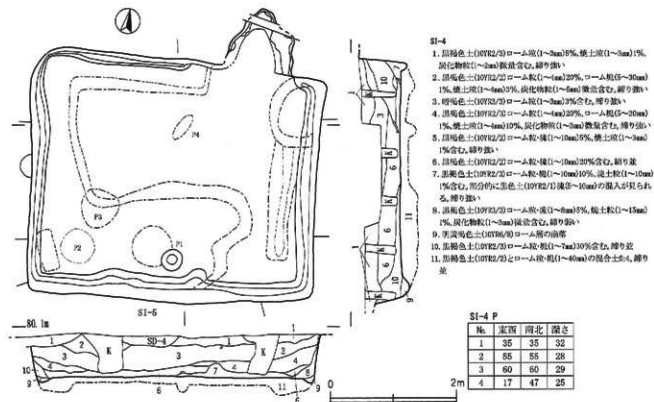
柱穴・貯蔵穴、出入口施設などは確認出来なかった。

カマドは壁を幅110cm、奥行100cmの不整な半円形に切り込み、白色粘土で築かれていた。また、構築材として男瓦が使用されていた。住居跡の廃絶に際して破壊されたものか、支脚は遺存せず、構築材の瓦もカマド前に散在していた。男瓦は断片を含め5個体分が出土し、内4点には人名と考えられる文字が記されていた。埋積土は10層に分けられ、自然埋没と考えられる。

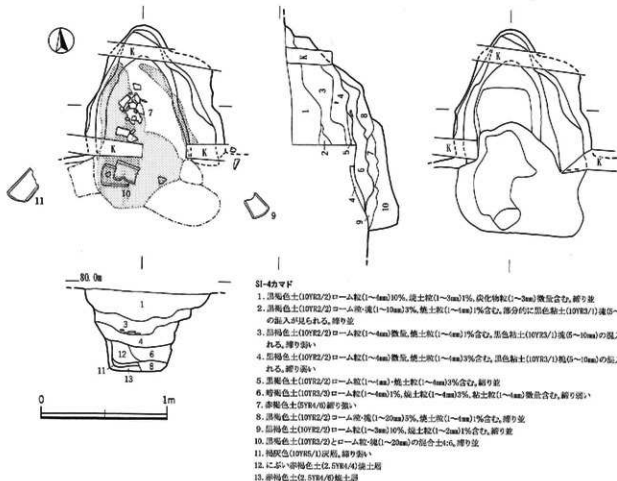
遺物はカマド構築材の男瓦の他、土師器杯、須恵器杯、高台杯、鉢、石製紡錘車などがある。

遺物 (第19～21図、第6・7表、図版19・20)

内面黒色処理の土師器杯(1)、須恵器杯(2・3)、高台杯(4)、鉢(5)土師器甕(下野型=6、武蔵型=7)、男瓦(8～12)、石製紡錘車(13)などがあり、3の須恵器杯は体部外面に墨書「王カ」が銘記されていたが判読し難い。(柏崎)



第17図 SI-4



SI-4カマド

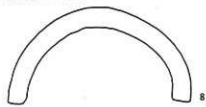
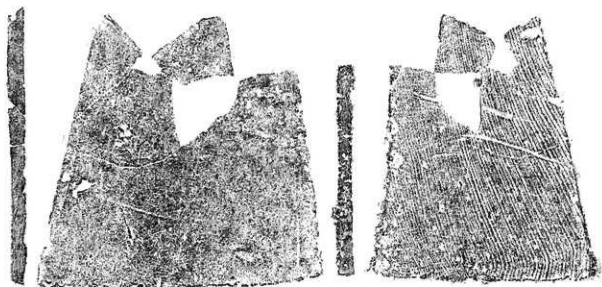
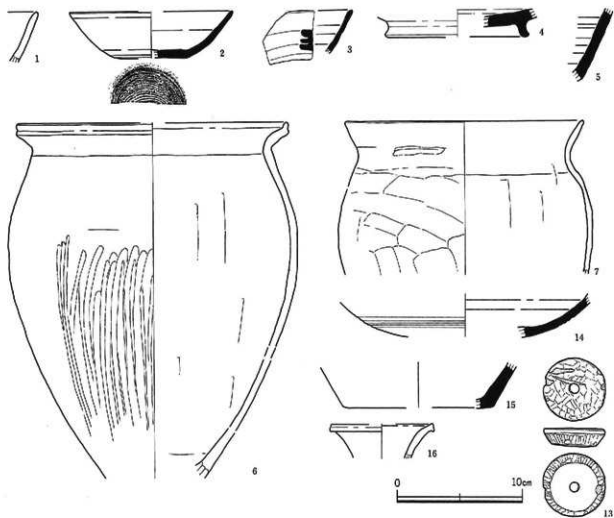
1. 黒褐色土(10YR2/2)ローム状(1~4cm)3%、黄土粒(1~3mm)1%、炭化物粒(1~3mm)微量含む、すり波
2. 黒褐色土(10YR2/2)ローム状(1~10cm)3%、黄土粒(1~4mm)1%含む、部分的に黒色粘土(10YR3/1)混入(10cm)の混入が見られる、すり波
3. 黒褐色土(10YR2/2)ローム状(1~4cm)微量、黄土粒(1~4mm)3%含む、黒色粘土(10YR3/1)混入(5~10cm)の混入が見られる、すり波
4. 黒褐色土(10YR2/2)ローム状(1~4cm)微量、黄土粒(1~4mm)3%含む、黒色粘土(10YR3/1)混入(5~10cm)の混入が見られる、すり波
5. 黒褐色土(10YR2/2)ローム状(1~4cm)、黄土粒(1~4mm)3%含む、すり波
6. 暗褐色土(10YR3/2)ローム状(1~4cm)1%、黄土粒(1~4mm)3%、粘土粒(1~2mm)1%含む、すり波
7. 赤褐色土(5YR4/4)粘り強い
8. 黒褐色土(10YR2/2)ローム状(1~20cm)3%、黄土粒(1~4mm)1%含む、すり波
9. 黒褐色土(10YR2/2)ローム状(1~3cm)16%、黄土粒(1~2mm)1%含む、すり波
10. 黒褐色土(10YR2/2)とローム状(1~20cm)の混合土4%、すり波
11. 焼成色(5YR5/4)灰肌、粘り強い
12. 焼成色土(5YR4/4)粘土層
13. 赤褐色土(5YR4/4)粘土層

第18図 SI-4カマド

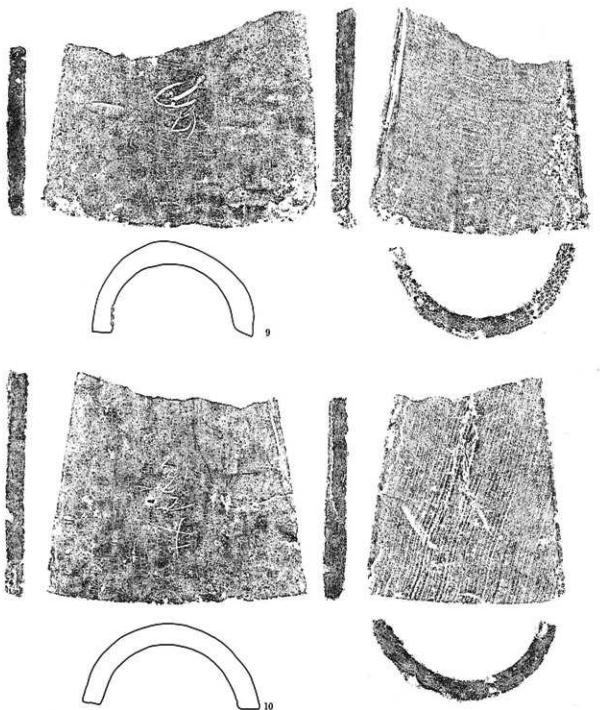
第6表 SI-4 出土遺物観察表 (1)

() 推定値 [] 現存値

No.	種別 器種	大きさ (cm) 口径・器高・底径	遺存度	整形・手触等	胎土、焼成、色調	備考
4-1	土師器 坏	口径 — 器高 — 底径 —	口辺部片	外蓋ナデ一部ミガキ、内面ミガキ後 黒色処理	胎土 焼成 色調 青透 明灰 7.5YR5/6	埴輪土2区
4-2	須恵器 坏	口径 (13.0) 器高 3.75 底径 (5.9)	20%	コクロ壺形、体部下端、底部外周部 削ヘラ削り、底部糸切り	胎土 焼成 色調 白色灰、黒色粒、1~2mm粒 灰 5Y4/1	埴輪土1区 内面土紋自然熱灰
4-3	須恵器 坏	口径 — 器高 — 底径 —	破片	コクロ壺形	胎土 焼成 色調 白色粒、2~3mm粒 良好 灰 7.5Y4/1	埴輪土3区 外面に墨書「王」?
4-4	須恵器 高台坏	口径 — 器高 [2.2] 底径 (11.2)	底部片	コクロ壺形、底部回転ヘラ削り	胎土 焼成 色調 長石 普通 灰白 10YR7/1	埴輪土1区
4-5	須恵器 钵	口径 — 器高 — 底径 —	破片	コクロ壺形	胎土 焼成 色調 白色粒、雲母、2~3mm粒 良好 色調 灰 NS/0	埴輪土2区
4-6	土師器 甕	口径 (21.5) 器高 [28.3] 底径 —	40%	口縁部横ナデ、体部外面縦のミガキ、 内面ヘラナデ	胎土 焼成 色調 長石、雲母 普通 色調 黒粒 10YR5/2	埴輪土2区 下野型
4-7	土師器 甕	口径 19.0 器高 [12.3] 底径 —	30%	口縁部横ナデ、体部上位傾方向のヘ ラ削り、中位傾方向のヘラ削り、内 面ヘラナデ	胎土 焼成 色調 雑砂粒、赤褐色粒 良好 内面 色調 明赤褐 5YR5/6	カマド1 武蔵型
4-14	須恵器 高台坏	口径 — 器高 — 底径 —	底部片	コクロ壺形、底部ヘラ削り、高台部 り付けの高の4条の比線が認められ る	胎土 焼成 色調 白色粒、2~3mm粒 良好 色調 灰 7.5Y5/1	埴輪土2区
4-15	須恵器 甕	口径 — 器高 [3.6] 底径 (12.1)	底部片	体部外面ヘラ削り、内面指ナデ	胎土 焼成 色調 雲母 普通 色調 灰 5Y4/1	埴輪土3区
4-16	灰精 溜	口径 (8.1) 器高 [2.7] 底径 —	口辺部片	コクロ壺形	胎土 焼成 色調 黒色粒 良好 色調 灰黄 2.5Y6/2	



第19圖 SI-4出土遺物(1)

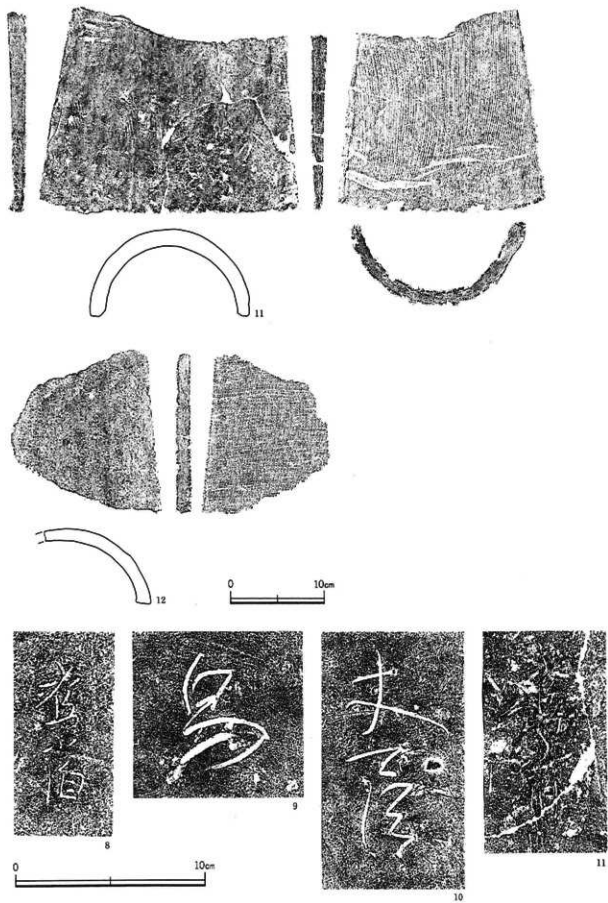


第20図 SI-4出土遺物(2)

0 10cm

第7表 SI-4出土遺物観察表(2)

No.	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	形状・手法等	備考					
	器種										
4-8	瓦 男瓦	[28.4]	19.8	—	前面に素材の糸切痕, 凸面ナデ	「雀部小瓶」のへら書き					
4-9	瓦 男瓦	[22.3]	18.2	—	側面衝目, 凸面ナデ	カマド8 「鳥」のへら書き					
4-10	瓦 男瓦	[23.5]	18.8	—	前面に素材の糸切痕, 凸面ナデ	カマド5 「太郎区」のへら書き					
4-11	瓦 男瓦	[21.0]	16.9	—	前面に素材の糸切痕, 凸面ナデ	カマド9 「雀部小瓶」のへら書き					
4-12	瓦 男瓦	—	—	—	側面衝目	No.1					
No.	種別	上面径 (mm)	下面径 (mm)	厚さ (mm)	上孔 (mm)	下孔 (mm)	重さ (g)	石質	遺存度	形状・手法等	備考
4-13	石製品 紡錘車	50.9 × 60.0	38.55 × 38.25	14.85	8.68 × 7.7	7.4 × 7.25	61.3	滑石	100%	上面と側面に調整痕を殺す	埋蔵土2区



第21图 SI-4出土遺物(3)

SI-5

遺構 (第22～24図、図版8A～9D)

調査区の南西の3区中央やや西寄り、A2・A3・B2・B3Grに跨って所在する。北東はSI-4に切られ、南はSI-8のカマドに切られていた。さらに、中央部は東西に中世の溝(SD-6)、西端は南北に近代溝(SD-5)に切られていた。

平面形・規模は、前記の状況から明確にし難い。南長は中央部で8m、現存東西は5.7mであるが柱穴と壁の位置関係から約8mと推定され、本来は一辺8m程の方形であったと推察する。北辺の中程にカマドが築かれ、カマドを通る主軸方位はN-23°-Wを示す。

壁は現存高62～70cmでほぼ直立する。壁下には幅20～25cm、深さ8～15cmの壁溝が設けられており、カマド部分を除き全体に設けられていたと考えられる。

床面は掘りの後ローム主体の土で整地しており、建て替え拡張に際しては旧い床面の上に数cm程の厚さで貼床していた。この為、旧い床面から最終時の床面までは約10cm嵩上げされていた。

柱穴は4基(P1～P4)確認し、いずれも主柱穴と考えられる。P2は後出のSI-4の床面下で確認された。なお、出入口施設は推定位置がSI-8のカマドに切られていて明瞭でなかったが、P5がこれに当たる。

また、床面下の調査で計20基の小穴(P5～P25)を確認した。このうち、P6～P9、P11～P14、P16～P19の3組の主柱にそれぞれP10、P15、P19の出入口施設が伴う3回の建て替え拡張の存在が推察された。また、壁溝も一部にその痕跡が認められた。拡張に際して柱穴は、南半の2本が対角線上を外に、北半の2本はそれぞれ東と西に向かって広がる。カマドのある北壁の位置を変えず拡張を繰り返すが、最後は北半の柱も北東・北西の対角線上に拡張し、北壁及びカマドも北へ移動したと判断される。当初の堅穴と最終時の面積比は1:2.4程と推定される。

なお、拡張途中での貯蔵穴と推定されるP25は確認されたが、最終段階での貯蔵穴は確認出来なかった。SI-4との重複で失われたものか、当初より設けられなかったのかは判断し難いところである。

カマドは壁を幅90cm、奥行60cmの三角形に掘り込み、白色粘土で築かれていた。全体的に遺存状態が悪く、支脚も遺存しなかった。

埋積土は16層に分けられ、自然埋没と考えられる。

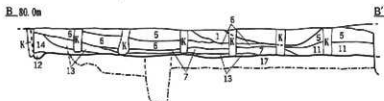
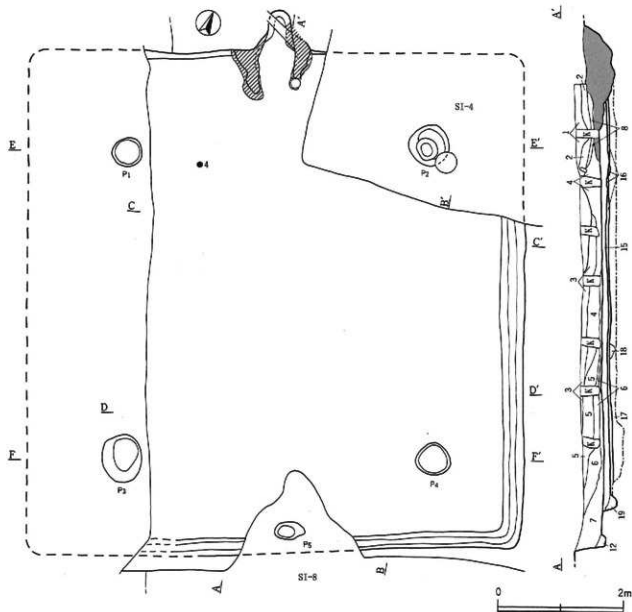
遺物は埋積土中より比較的多く出土したが小破片が多く、南側の床面より出土した鉄鍔がほぼ完形の他は完形に復元できるものは無かった。

遺物 (第25図、第8・9表、図版21)

土師器坏(1～5)、鉢(6)、高坏(7)、甕(10)、須恵器蓋(8)、壺(9)、石製紡錘車(12)、鉄鍔(13)、ガラス小玉(14)など多彩である。11の女瓦は埋積土に混入したものと考えられる。(水野)

第8表 SI-5 出土遺物観察表(1)

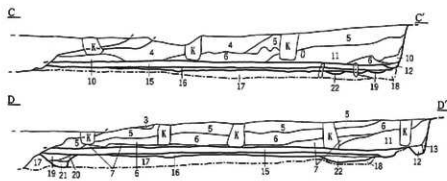
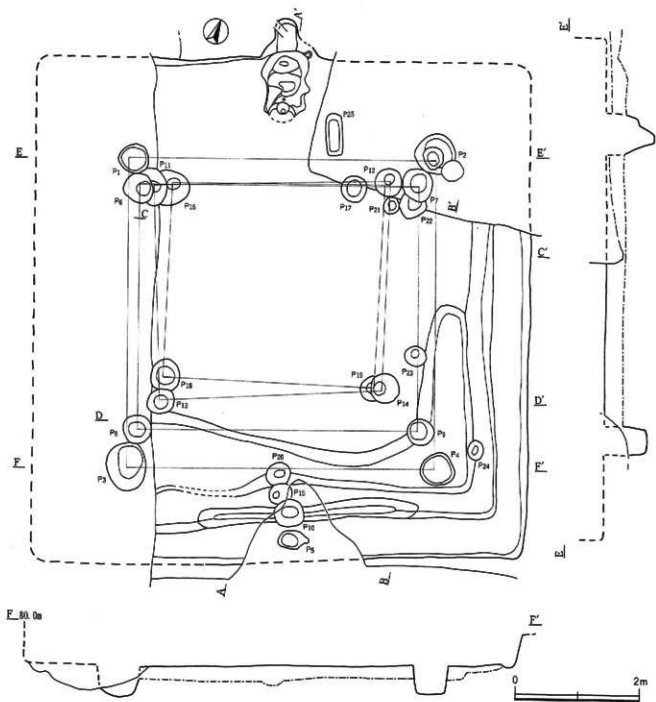
No.	種別 器種	上面径 (mm)	下面径 (mm)	厚さ(mm)	上孔(mm)	下孔(mm)	高さ(g)	材質	遺存度	整形・手法等	備考
5-11	石製紡錘車	42.8	31.0	18.8	—	7.2	27.6	滑石	50%	全体をミガキ、上面に本来の放射状筋が認められる	願方3区
No.	器種	全長(mm)	身幅(mm)	身厚(mm)	径幅(mm)	底厚(mm)	遺存度			整形・手法等	備考
5-12	鉄製品 鍔	165.0	8.0	6.5	4.5	4.0	100%				主塚掘削式
No.	種別 器種	径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	遺存度					整形・手法等	備考
5-13	ガラス製品 小玉	3.6×3.0	2.85	1.0	100%						埋積土9区 ブルー



SI-6

1. 黒褐色土(OYR2/2)ローム粒(1~3mm)20%, 粘土粒(1~3mm)、炭化物粒(1~4mm)、粘土粒(1~5mm)微量含む、埴り強い
2. 黒色土(OYR2/1)ローム粒(1~3mm)5%, 黄土粒(1~3mm)微量含む、埴り強い
3. 黒褐色土(OYR2/2)ローム粒(1~4mm)49%, ローム塊(5~10mm)5%含む、埴り強い
4. 黒褐色土(OYR2/2)ローム粒(1~4mm)20%, ローム塊(5~10mm)10%含む、埴り強い
5. 暗褐色土(OYR2/2)ローム粒(1~4mm)30%, ローム塊(5~20mm)3%, 粘土粒(1~3mm)、炭化物粒(1~2mm)微量含む、埴り強い
6. 暗褐色土(OYR2/2)ローム粒(1~4mm)30%, ローム塊(5~20mm)1%, 粘土粒(1~3mm)、炭化物粒(1~2mm)微量含む、僅かに黒色土(OYR2/1)の混入が見られる、埴り強い
7. 暗褐色土(OYR2/2)ローム粒(1~4mm)30%, ローム塊(5~20mm)1%, 炭化物粒(1~2mm)微量含む、黒色土(OYR2/1)混入20%超える、埴り強い
8. 灰質褐色土(OYR4/2)ローム粒(1~3mm)5%, 粘土粒(1~10mm)10%, 粘土粒(1~3mm)微量含む、僅かに黒色土(OYR2/1)の混入が見られる、埴り強い
9. 灰質褐色土(OYR4/2)ローム粒(1~3mm)5%, 粘土粒(1~10mm)60%, 粘土粒(1~3mm)微量含む、埴り極めて強い
10. 暗褐色土(OYR2/2)とローム粒(1~10mm)の混合土4, 埴り強い
11. 暗褐色土(OYR2/2)ローム粒(1~3mm)20%, ローム塊(5~3mm)1%, 粘土粒(1~3mm)微量含む、埴り強い
12. 茶褐色土(OYR2/2)ローム粒(1~3mm)20%, 粘土粒(1~2mm)微量含む、埴り強い
13. 暗褐色土(OYR2/2)ローム粒(1~10mm)30%, 黄土粒(1~3mm)、炭化物粒(1~2mm)微量含む、埴り強い
14. 暗褐色土(OYR2/2)ローム粒(1~4mm)30%, ローム塊(5~20mm)3%, 炭化物粒(1~2mm)微量含む、埴り強い
15. 黒色土(OYR2/1)とローム粒(1~6mm)の混合土4, 埴り強い(惣地層)
16. 暗褐色土(OYR2/2)とローム粒(1~10mm)の混合土5, 埴り強い(惣地層)
17. にがい黄褐色土(OYR5/2)ローム粒(1~20mm)微量含む、埴り極めて強い(惣地層)
18. 黒褐色土(OYR2/2)ローム粒(1~20mm)30%含む、埴り強い(惣地層)
19. 黒色土(OYR2/1)とローム粒(1~6mm)の混合土4, 埴り極めて強い(惣地層)
20. にがい黄褐色土(OYR5/2)ローム粒(1~4mm)3%含む、埴り極めて強い(惣地層)
21. 黒色土(OYR2/1)とローム粒(1~6mm)の混合土4, 埴り極めて強い(惣地層)
22. 暗褐色土(OYR2/2)とローム粒(1~10mm)の混合土5, 埴り強い(惣地層)

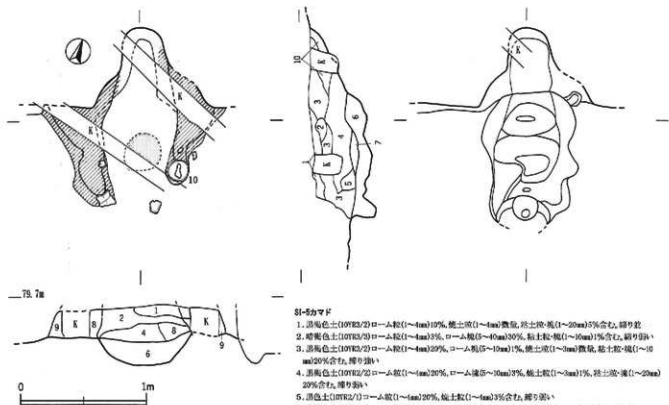
第22図 SI-5



SI-5 P

	東			西			南			北		
No.	東	西	深さ	No.	東	西	南	北	深さ			
1	50	45	40	14	48	48	86					
2	65	65	66	15	45	(25)	38					
3	63	75	90	16	(45)	57	36					
4	55	50	47	17	40	45	35					
5	45	30	24	18	47	50	58					
6	45	50	70	19	(20)	40	58					
7	50	55	70	20	40	40	48					
8	45	45	66	21	25	25	26					
9	44	42	69	22	45	(30)	31					
10	50	45	46	23	45	30	69					
11	—	62	30	24	25	30	20					
12	45	50	75	25	30	65	33					
13	45	40	74									

第23図 SI-5掘方



SI-5カマダ

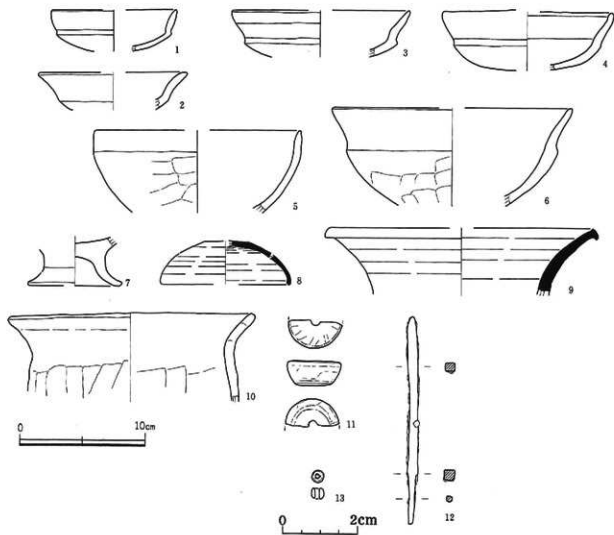
1. 赤褐色土(10YR2/2)ローム粒(1~4mm)10%、焼土粒(1~4mm)微量、粘土粒(1~20mm)5%含む、埴り跡
2. 暗褐色土(10YR3/2)ローム粒(1~4mm)3%、ローム粒(5~10mm)10%、粘土粒(1~10mm)1%含む、埴り跡
3. 赤褐色土(10YR3/2)ローム粒(1~4mm)20%、ローム粒(5~10mm)1%、焼土粒(1~3mm)微量、粘土粒(1~10mm)20%含む、埴り跡
4. 赤褐色土(10YR2/2)ローム粒(1~4mm)20%、ローム粒(5~10mm)3%、粘土粒(1~3mm)1%、粘土粒(1~20mm)20%含む、埴り跡
5. 赤土(5YR2/1)ローム粒(1~4mm)20%、粘土粒(1~4mm)3%含む、埴り跡
6. 暗褐色土(10YR3/2)ローム粒(1~20mm)20%、焼土粒(1~4mm)1%、粘土粒(1~4mm)3%含む、埴り跡
7. 赤褐色土5YR2/6焼土層
8. 赤土(5YR3/4)ローム粒(1~4mm)3%、粘土粒(1~3mm)1%、粘土粒(1~4mm)10%含む、埴り跡
9. 赤褐色土(10YR2/2)ローム粒(1~3mm)1%含む、埴り跡
10. 赤褐色土(10YR2/2)ローム粒(1~4mm)20%、ローム粒(5~10mm)1%、粘土粒(1~3mm)3%、炭化物粒(1~3mm)1%含む、埴り跡

第24図 SI-5カマダ

第9表 SI-5 出土遺物観察表 (2)

() 推定銘 () 現存数

No.	種別	大きさ (cm)	埋存度	形状・手法等	胎土、焼成、色調	備考
5-1	土師器 坏	口径 (10.0) 器高 [3.3] 底径 —	20%	口縁部横ナデ、体・底部ヘラ削り、 内面ナデ、ウツシ処理	胎土 白色粒、角閃石 焼成 二次被焼 色調 靑灰橙 10YR5/1	Ⅱ方2区
5-2	土師器 坏	口径 (11.7) 器高 [3.0] 底径 —	口辺部片	口縁部横ナデ、体部ヘラ削り、内面 ナデ、ウツシ処理	胎土 微砂粒 焼成 良好 色調 浅黄橙 10YR8/3	P1
5-3	土師器 坏	口径 (14.2) 器高 [3.7] 底径 —	口辺部片	口縁部横ナデ、体部ヘラ削り、内面 ナデ	胎土 微砂粒 焼成 二次被焼 色調 浅黄橙 7. 5YR8/3	Ⅱ貯穴
5-4	土師器 坏	口径 (13.5) 器高 4.7 底径 —	70%	口縁部横ナデ、内面ナデ、ウツシ処 理	胎土 角閃石 焼成 二次被焼 色調 浅黄橙 10YR8/4	No.5 底部円形の黒斑
5-5	土師器 坏	口径 (16.4) 器高 [6.6] 底径 —	破片	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り、 内面ナデ	胎土 赤褐色粒 焼成 良好 色調 ぶい黄橙 10YR6/4	埋積土7区
5-6	土師器 鉢	口径 (19.0) 器高 [7.8] 底径 —	破片	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り、 内面ヘラナデ、ウツシ処理	胎土 黒色粒 焼成 普通 色調 ぶい橙 7. 5YR7/3	Ⅱ貯穴
5-7	土師器 高坏	口径 — 器高 [3.9] 底径 (7.5)	脚部	脚部内外面ナデ	胎土 黒色粒、赤褐色粒 焼成 普通 色調 ぶい橙 7. 5YR7/4	Ⅱ貯穴
5-8	須恵器 盃	口径 (10.1) 器高 [3.5] 底径 —	20%	コクロ整形、甲を同輪ヘラ削り	胎土 黒色粒 焼成 良好 色調 靑灰 2. 5Y5/1	Ⅱ貯5区
5-9	須恵器 甕	口径 (21.1) 器高 [5.4] 底径 —	口辺部片	コクロ整形	胎土 白色粒 焼成 普通 色調 灰 5Y6/1	
5-10	土師器 甕	口径 19.2 器高 [7.2] 底径 —	20%	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り、 内面ヘラナデ	胎土 長石、角閃石、3mm礫 焼成 普通 色調 橙 7. 5YR6/6	カマダNo.3 口縁部黒斑



第25図 SI-5出土遺物

SI-8

遺構 (第26～28図、図版9E～11H)

調査区の南西の3区南端、A2・B2Grに所在し、南端の一部は調査区外に延びる。北がSI-5と重複し、これを切る。西は近代の溝SD-5に切られていた。

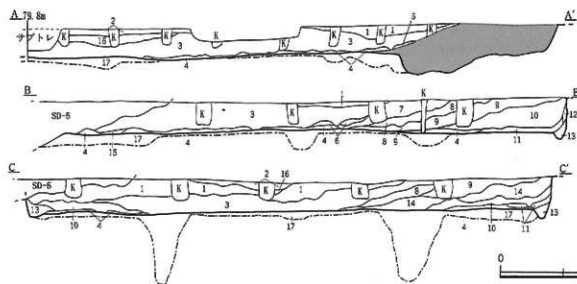
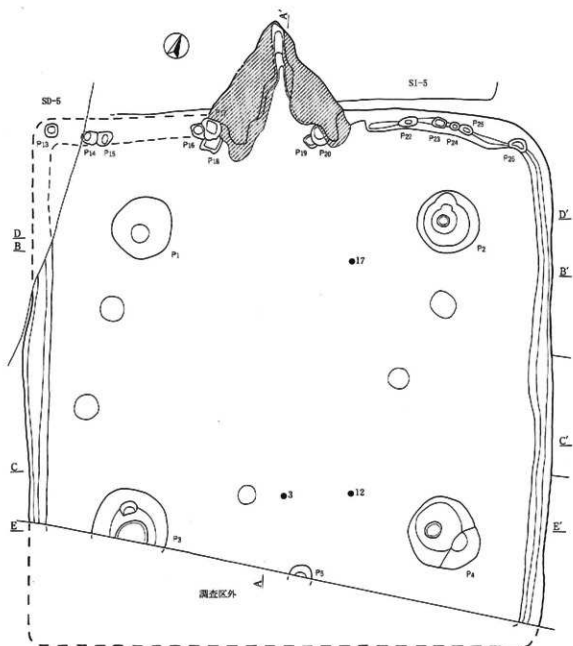
平面形・規模は、前記の状況から明確にし難いが、東長は8.3m、現存南北長が7.8m、柱穴と壁の位置関係から南北長も8.3mと推定され、本来は一辺8.3mの隅丸方形と考えられる。北辺の中程にカマドが築かれており、カマドを通る主軸方位はN-24°-Wを示す。

壁は現存高48～55cmではほぼ直立する。壁下には幅15～20cm、深さ8cm程の壁溝が設けられており、カマド部分を除き圍繞していたと推察される。

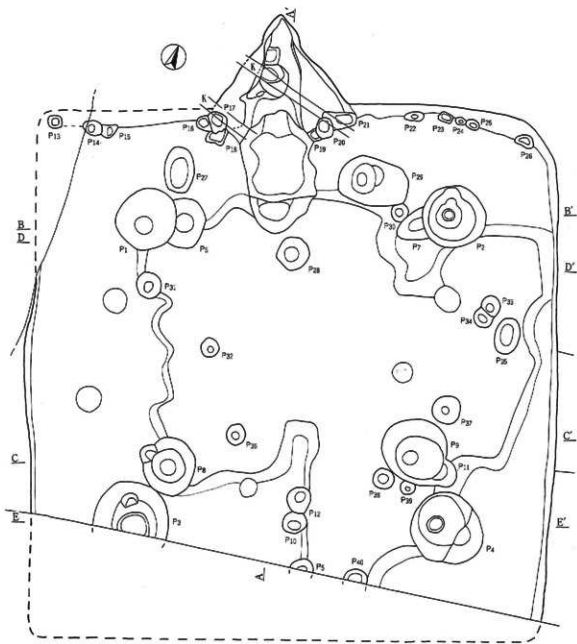
床面は粗掘りの後ローム主体の土で整地したもので、平坦で堅く締っていた。なお、床面下の掘り込みは主柱穴より内側の中央部を掘り残し、その外側の掘り込みが顕著であった。

柱穴はP1～P4の4基確認し、いずれも主柱穴と考えられる。また、P5は出入口の施設と思われる。なお、北辺の壁に接して多数の小穴(P13～P26)が認められ、壁柱穴と考えられる。殊にP16～P18、P19～21はそれぞれカマドの脇に繰り返し掘られていることから、カマドに関連する施設と思われる。

カマドは壁を幅2.4cm、奥行1.6cmの三角形に掘り込み、白色粘土で築かれていた。大部分がSI-5の埋積土



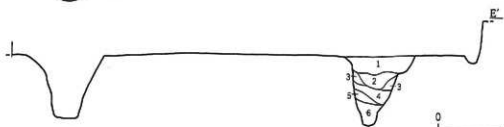
第26図 SI-8



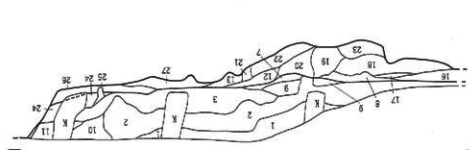
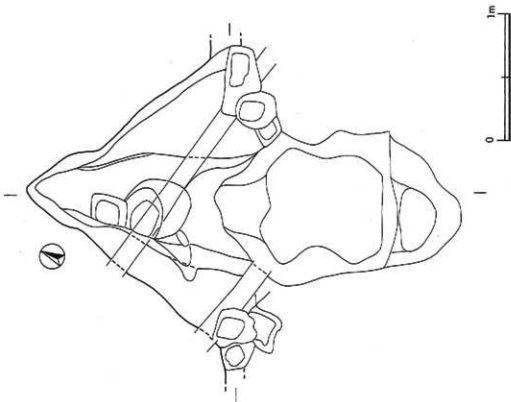
D. 79. 北



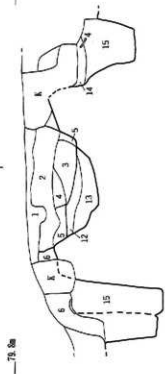
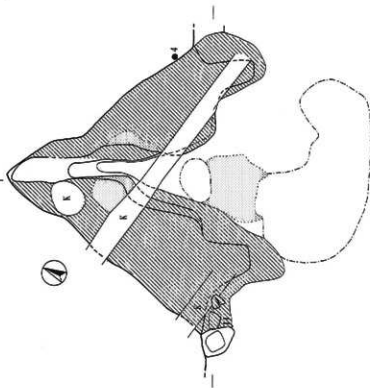
E.



第27图 SI-S掘方



第28圖 SI-8カマド



S1-8

1. 黒褐色土(0YR2/3)ローム状・塊(1~12mm)5%、塊土状(1~4mm)微量含む、粘り強い
2. 黒褐色土(0YR2/3)ローム状・塊(1~12mm)3%、塊土状(1~2mm)微量含む、粘り強い
3. 暗褐色土(0YR3/3)ローム状・塊(1~2mm)19%、塊土状(1~5mm)13%、炭化物粒(1~4mm)微量含む、粘り強い
4. 暗褐色土(0YR3/3)とローム状・塊(1~20mm)の割合±5%、粘り強い
5. 暗褐色土(0YR3/3)とにぶい黄褐色土(0YR6/3)の割合±5%、炭化物粒(1~3mm)微量含む、やや粘り強い、粘り強い
6. 暗褐色土(0YR3/3)とローム状・塊(1~10mm)の割合±5%、塊土状(1~4mm)微量含む、粘り強い
7. 暗褐色土(0YR3/3)ローム状・塊(10~30mm)10%含む、粘り強い
8. 黒褐色土(0YR2/2)とローム状・塊(1~20mm)の割合±5%、粘り強い
9. 黒褐色土(0YR2/2)ローム状(1~3mm)18%、塊土状(1~3mm)微量含む、粘り強い
10. 暗褐色土(0YR3/3)ローム状(1~3mm)20%、ローム塊(3~30mm)20%、塊土状(1~4mm)1%、炭化物粒(1~3mm)微量含む、粘り強い
11. 暗褐色土(0YR3/3)ローム状(1~3mm)10%、塊土状(1~3mm)微量含む、粘り強い
12. 灰青ローム
13. 暗褐色土(0YR3/3)ローム状(1~3mm)30%、塊土状(1~2mm)微量含む、粘り強い
14. 暗褐色土(0YR3/3)と暗褐色土(0YR2/2)の割合±6%、ローム状・塊(1~30mm)20%含む、KP(1~3mm)の混入が微量見られる、粘り強い
15. 黒褐色土(0YR2/2)ローム状(1~3mm)8%、塊土状(1~3mm)微量含む、KP(1~4mm)10%粗混入、粘り強い
16. にぶい黄褐色土(0YR6/3)ローム状(1~4mm)20%、塊土状(1~3mm)1%、炭化物粒(1~3mm)微量含む、粘り強い
17. 黒褐色土(0YR2/2)とローム状・塊(1~40mm)の割合±6%、一部に塊土状(1~4mm)と塊土状(1~4mm)の混入が見られる、粘り強い(肥地層)

S1-9 P-4

1. 黒褐色土(0YR3/3)ローム状(1~3mm)8%、ローム塊(3~20mm)1%、塊土状(1~5mm)1%含む、粘り強い
2. 黒褐色土(0YR2/2)ローム状(1~4mm)5%、ローム塊(3~10mm)1%含む、粘り強い
3. 黒褐色土(0YR2/2)ローム状・塊(1~20mm)10%含む、粘り強い
4. 暗褐色土(0YR3/3)とローム状・塊(1~10mm)の割合±5%、粘り強い
5. 暗褐色土(0YR3/3)ローム状(1~4mm)10%、ローム塊(3~10mm)1%含む、粘り強い
6. 暗褐色土(0YR3/3)ローム状(1~4mm)10%、ローム塊(3~10mm)3%、KP(1~4mm)1%含む、粘り強い

S1-6中F2

1. 黒褐色土(0YR2/2)ローム状(1~3mm)1%、塊土状(1~3mm)微量含む、粘り強い
2. にぶい黄褐色土(0YR6/3)ローム状(1~4mm)3%、ローム塊(3~10mm)1%、塊土状・塊(1~30mm)1%、炭化物粒(1~3mm)微量含む、粘り強い
3. 暗褐色土(0YR2/2)ローム状・塊(1~10mm)3%、塊土状・塊(1~10mm)20%、炭化物粒(1~10mm)3%含む、粘り強い
4. 暗褐色土(0YR2/2)ローム状・塊(1~10mm)3%、塊土状・塊(1~10mm)20%、炭化物粒(1~10mm)3%含む、粘り強い
5. 暗褐色土(0YR2/2)ローム状(1~3mm)3%、塊土状(1~3mm)1%含む、粘り強い
6. にぶい黄褐色土(0YR6/3)粘り強い(自然層を利用したと思われる)
7. 暗褐色土(0YR3/3)塊土状、粘り強い
8. 黒褐色土(0YR2/2)塊土状(1~3mm)1%含む、炭化物粒、粘り強い
9. 黒褐色土(0YR3/3)塊土状(1~3mm)1%含む、粘り強い
10. 暗褐色土(0YR2/2)ローム状(1~2mm)微量、塊土状・塊(1~6mm)3%、塊土状・塊(1~6mm)10%含む、やや粘り強い、粘り強い
11. 黒褐色土(0YR2/2)ローム状(1~3mm)1%、塊土状・塊(1~7mm)40%含む、粘り強い
12. 暗褐色土(0YR3/3)炭褐色土(4~5mm)・塊土状・塊(1~10mm)1%含む、粘り強い(肥地層)
13. 暗褐色土(0YR3/3)ローム状・塊(1~20mm)5%、炭褐色土(1~10mm)1%、塊土状・塊(1~20mm)炭化物粒(1~5mm)微量含む、粘り強い(肥地層)
14. 黒褐色土(0YR2/2)ローム状・塊(1~20mm)40%、塊土状(1~2mm)微量含む、粘り強い(肥地層)
15. 黒褐色土(0YR2/2)ローム状・塊(1~30mm)10%、塊土状(1~2mm)微量含む、粘り強い(肥地層)
16. 黒褐色土(0YR2/2)とローム状・塊(1~40mm)の割合±5%、粘り強い(肥地層)
17. 暗褐色土(0YR3/3)ローム状(1~3mm)10%含む、粘り強い(肥地層)
18. 暗褐色土(0YR3/3)とローム状・塊(1~10mm)の割合±5%、塊土状(1~4mm)炭化物粒(1~4mm)1%含む、粘り強い(肥地層)
19. にぶい黄褐色土(0YR6/3)ローム状(1~4mm)10%、ローム塊(3~30mm)塊土状(1~4mm)1%、炭褐色土(1~3mm)炭化物粒(1~3mm)微量含む、粘り強い(肥地層)
20. にぶい黄褐色土(0YR6/3)ローム状・塊(1~20mm)60%、塊土状(1~3mm)1%、炭褐色土(1~3mm)微量含む、粘り強い(肥地層)
21. 暗褐色土(0YR2/2)ローム状・塊(1~10mm)20%、塊土状(1~4mm)1%含む、粘り強い(肥地層)
22. にぶい黄褐色土(0YR6/3)とローム状・塊(1~10mm)の割合±5%、塊土状(1~4mm)1%、炭化物粒(1~3mm)微量含む、粘り強い(肥地層)
23. にぶい黄褐色土(0YR6/3)とローム状・塊(1~10mm)の割合±5%、塊土状(1~4mm)炭化物粒(1~4mm)1%含む、粘り強い(肥地層)
24. 暗褐色土(0YR3/3)ローム状(1~4mm)微量、塊土状(1~3mm)1%含む、粘り強い(肥地層)
25. 暗褐色土(0YR3/3)ローム状(1~4mm)1%、塊土状(1~3mm)炭化物粒(1~3mm)微量含む、粘り強い(肥地層)
26. 暗褐色土(0YR3/3)とローム状・塊(1~40mm)の割合±5%、ローム塊(3~10mm)1%含む、粘り強い(肥地層)

S1-8 P

No.	東西	南北	深さ	No.	東西	南北	深さ
1	96	100	119	21	54	30	49
2	100	100	103	22	32	17	22
3	120	(60)	90	23	22	14	23
4	120	110	113	24	17	13	22
5	40	(20)	35	25	22	15	23
6	(50)	70	106	26	32	17	23
7	(42)	50	34	27	46	72	18
8	85	95	108	28	52	55	33
9	105	100	110	29	110	78	55
10	38	35	27	30	28	28	29
11	(40)	45	41	31	38	42	38
12	38	45	43	32	30	30	20
13	20	20	24	33	30	33	17
14	25	18	21	34	30	30	14
15	25	20	3	35	43	60	17
16	(20)	28	55	36	30	33	10
17	30	37	56	37	45	45	19
18	28	28	33	38	30	32	9
19	(12)	21	45	39	24	24	8
20	30	34	65	40	39	(21)	14

中にあり、掘方等は不明瞭であった。また、住居の廃絶に際して破壊されたものか、支脚は遺存せず、焚口部の遺存状態も悪い。

埋積土は16層に分けられ、人為的埋没と考えられる。

遺物は埋積土中より多数の土師器、須恵器が出土し、床面から出土したのも土師器が1点完形で出土した他は破片となったものが多い。

床面下の調査で19基の小穴（P6～P10、P27～P40）を確認した。建て替え拡張が行われたもので、P6～P9が古い支柱穴、P10が出入口の施設と考えられる。前記のSI-5と同様に南側は対角線上に移設、北辺はそれぞれ東と西に向かって移設し、カマドのある北壁は移動しなかったと推察される。なお、南東隅の古い柱穴P9の脇に先行するP11があり、出入口施設と見られるP10の内側にP12が設けられ、さらにもう1度（計2度）の建て替えの可能性が推察される。そう想定すると、カマド両脇の小穴（P16～18、P19～21）の重複と合致する。壁溝については古いものを確認できず、床面を嵩上げたのでは無く同じ深さで掘り広げたものと考えられる。

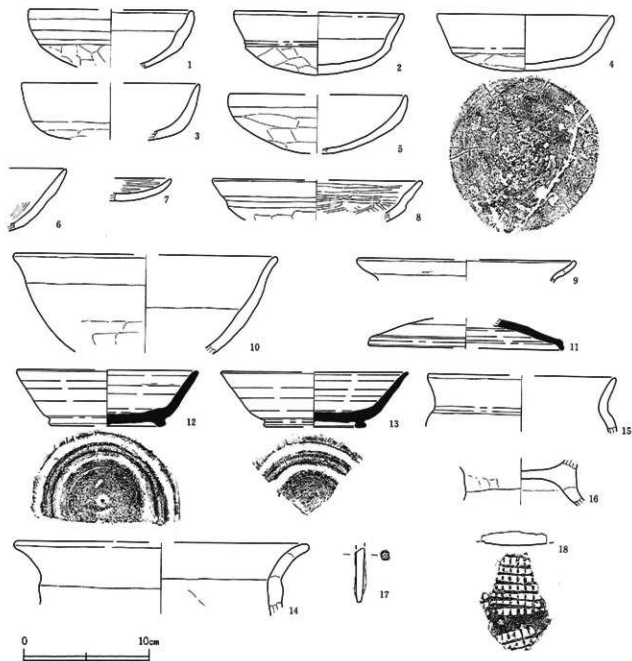
遺物（第29図、第10・11表、図版21）

土師器（1～5）、埴（6）、皿（7～9）、鉢（10）、甕（14・15）、台付甕（16）、須恵器蓋（11）、高台杯（12・13）の他鉄製品（17・鎌の茎？）、女瓦（18）などがある。土師器は橙色の胎土もしくは彩色してミガキを施した杯・皿・埴が目立つ。9は畿内産と思われる。（水野）

第10表 SI-8 出土遺物観察表（1）

() 推定値 [] 現存値

№	種別 器種	大きさ (cm)		遺存度	形状・手法等	胎土、焼成、色調	備考
		口徑	器高・底徑				
8-1	土師器 杯	口徑 (13.0) 器高 [4.6] 底徑 —	20%	口縁部横ナデ、体・底部へラ削り、 内面ロクロナデ、ウルシ処理	胎土 白色灰、赤褐色粒 焼成 普通 色調 にぶい焼 7.5YR5/4	№1	
8-2	土師器 杯	口徑 (13.4) 器高 5.0 底徑 —	25%	口縁部横ナデ、体・底部へラ削り、 内面ロクロナデ	胎土 白色灰 焼成 二次被熱 色調 橙 2.5YR6/6	埋積土2区	
8-3	土師器 杯	口徑 (14.2) 器高 [4.5] 底徑 —	20%	口縁部横ナデ、体・底部へラ削り、 内面へラナデ、ウルシ処理	胎土 白色灰 焼成 普通 色調 灰黄焼 10YR5/2	№4	
8-4	土師器 杯	口徑 14.1 器高 4.5 底徑 —	100%	口縁部横ナデ、体・底部へラ削り、 ウルシ処理	胎土 赤褐色粒 焼成 普通 色調 橙 5YR6/6	カマド№3	
8-5	土師器 杯	口徑 (14.1) 器高 4.7 底徑 —	20%	口縁部横ナデ、体・底部へラ削り、 内面ウルシ処理	胎土 白色灰 焼成 普通 色調 淡黄焼 10YR8/4	掘方2区	
8-6	土師器 埴	口徑 — 器高 — 底徑 —	破片	口縁部横のミガキ、体部外面へラ削り、 内面放射状のミガキ	胎土 白色灰 焼成 普通 色調 明赤焼 2.5YR5/8	掘方2区	
8-7	土師器 杯	口徑 — 器高 — 底徑 —	破片	口縁部横ナデ、体部外面へラ削り、 内面ミガキ	胎土 白色灰 焼成 普通 色調 明赤焼 2.5YR5/8	掘方2区	
8-8	土師器 杯	口徑 (16.7) 器高 [3.2] 底徑 —	破片	口縁部横ナデ、体部外面へラ削り、 内面ミガキ	胎土 白色灰 焼成 普通 色調 明赤焼 2.5YR5/8	埋積土1区	
8-9	土師器 杯	口徑 (17.3) 器高 [1.8] 底徑 —	破片	口縁部外面ミガキ	胎土 白色灰 焼成 普通 色調 明赤焼 5YR5/8	埋積土3区 畿内産か	
8-10	土師器 鉢	口徑 (20.6) 器高 [7.6] 底徑 —	破片	口縁部横ナデ、体部下半へラ削り、 内面へラナデ、ウルシ処理	胎土 白色灰 焼成 普通 色調 淡黄焼 10YR8/3	掘方2区	
8-11	須恵器 蓋	口徑 (15.5) 器高 [2.35] 底徑 —	60%	ロクロ整形、甲面へラ削り	胎土 長石、2～3mm燻 焼成 普通 色調 灰白 2.5Y7/1	カマド№1	
8-12	須恵器 高台杯	口徑 (14.4) 器高 4.5 底徑 (9.3)	50%	ロクロ整形、底面回転へラ削り、胎 土編みき上げ、付高台	胎土 長石、8mm燻 焼成 良好 色調 灰黄 2.5Y6/2	№5	
8-13	須恵器 高台杯	口徑 (14.8) 器高 4.4 底徑 (8.25)	25%	ロクロ整形、付高台	胎土 長石、4mm燻 焼成 良好 色調 暗黄灰 5B4/1	掘方2区	



第29図 SI-8出土遺物

第11表 SI-8出土遺物観察表(2)

() 推定値 [] 現存値

No.	類別		遺存度	整形・手印等	胎土, 焼成, 色調	備考	
	器種	大きさ (cm) 口径・器高・底径					
8-14	土師器 甕	口径 (23.8) 器高 [5.8] 底径 —	口辺部片	口縁部横ナデ, 体部外面クシ目後へラ削り, 内面斜めナデ	胎土 焼成 色調 普通 赤褐色 5YR4/6	P1マ	
8-15	土師器 甕	口径 (15.0) 器高 [14.3] 底径 —	口辺部片	口縁部横ナデ, 体部内面へラ削り	胎土 焼成 色調 普通 赤褐色 5YR6/6	カマド	
8-16	土師器 台付甕	口径 — 器高 — 底径 —	破片	胴部外面横ナデ, 体部ナデ, 脚部内面横ナデ	胎土 焼成 色調 普通 赤褐色 10YR4/2 ~ 10YR1 7/1	竈方4区	
8-18	瓦 女瓦	全長 — 幅 — 高さ —	破片	凸面格子クタキ	胎土 焼成 色調 二次焼熟 灰白 7.5YR8/1	図面参照	
No.	類別 器種	全長 (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	遺存度	整形・手印等	備考
8-17	煉製品 椀	[43.0]	5.5	6.0	茎のみ		No.6

SI-9

遺構 (第 30～32 図、図版 12A～13H)

調査区の南西の 3 区南東、B3・C2・C3Gr に所在する。東端の南半部が調査区外に延びる。北側が中世の溝跡 SD-6 を重複し、上部が切られていた。

平面形・規模は、東西長 7 m、南北長 7.15 m のほぼ方形と判断される。北辺の中央やや東寄りにカマドが設けられ、カマドを通る主軸方位は N-15°-W を示す。

壁は現存高 40～50 cm でほぼ直立する。壁下には幅 20～25 cm、深さ 10 cm 程の壁溝が設けられ、カマド部分を除き圍繞する。

床面は粗掘りの後ローム主体の土で整地したもので、ほぼ平坦で堅く締っていた。なお、床面下の掘り込みは主柱穴の内側を掘り残し、その外側の掘り込みが顕著であった。床面及び壁際の所々に焼土及び炭化材が認められ、火災住居と推察される。

小穴は P1～P9 の 9 基確認し、P1～P4 が主柱穴、P5 は出入口施設、P6・7 はカマドに伴う小穴と考えられる。貯蔵穴は確認されなかった。

カマドは壁を幅 60 cm、奥行 40 cm の半円形に掘り込み、白色粘土で築かれていた。壁外への掘り込みは煙道部分と考えられる。また、前述の如くカマドの両脇に小穴が設けられておりカマドに関連する施設と推定される。また、住居の廃絶に際して破壊されたものか、支脚は遺存せず、焚口部の遺存状態も悪い。

埋積土は 9 層に分けられ、自然埋没と考えられる。

遺物は埋積土中より土師器、須恵器片が多数出土し、他に比べ須恵器の占める割合が高い。また、須恵器にはヘラ記号の記されたものが多数見られた。

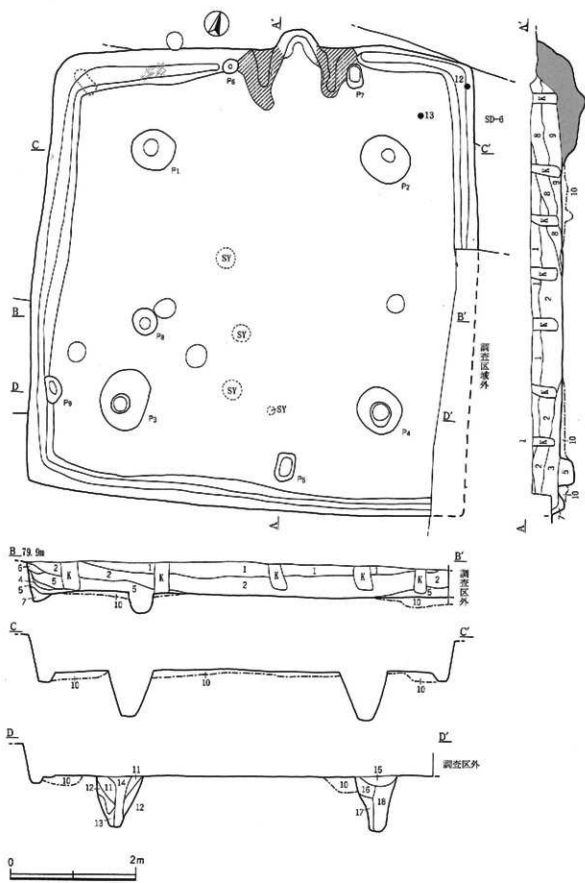
遺物 (第 33 図、第 12～14 表、図版 22)

土師器 坏 (1～4)、皿 (5・6)、蓋 (7)、瓶 (23)、甕 (24・25)、須恵器 甕 (8・9・23)、坏 (10～20)、壺 (22)、女瓦 (26)、鉄製品 (不明品)、石製品 (白玉) などがある。11 の須恵器坏は底部外面に「里」の墨書が銘記されていた。坏類の底部が「ヘラ起し」、「ヘラ削り」、「糸切後外周ヘラ削り」と様々で、胎土も異なることから多数の産地のものが混在すると考えられる。また、須恵器のうち、蓋 (9・21)、坏 (15～20)、壺口辺 (22) にはヘラ記号が見られた。

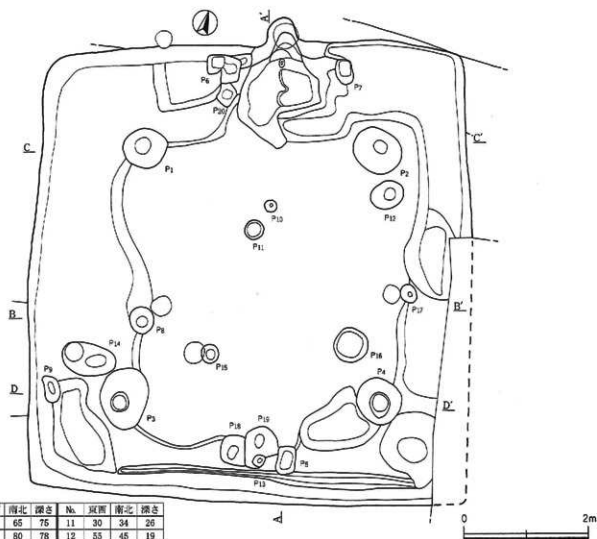
(水野)

SI-9

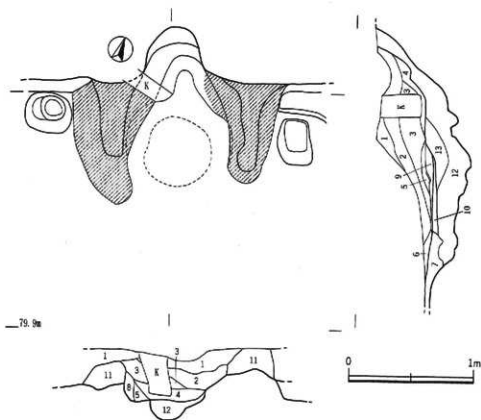
1. 赤褐色土 (01R2/2) ローム状 (1～4 cm) 20%、ローム塊 (5～10 cm) 1%、焼土 (1～3 cm) 形粒 (1～4 mm) 炭化含む、焼り跡あり
2. 黒褐色土 (01R2/2) ローム状 (1～4 cm) 20%、ローム塊 (5～20 cm) 3%、焼土 (1～3 cm) 炭化物粒 (1～3 mm) 凝灰岩粒 (1～5 mm) 炭化含む、焼り跡あり
3. 赤褐色土 (01R2/2) ローム状 (1～4 cm) 20%、ローム塊 (5～10 cm) 3%、焼土 (1～5 cm) 1%、炭化物粒・炭 (1～10 mm) 炭化含む、焼り跡あり
4. 黒褐色土 (01R2/2) 炭化物粒 (1～10 mm) の混合土 5%、焼土 (1～3 mm) 炭化含む、焼り跡あり
5. 赤褐色土 (01R2/2) ローム状 (1～4 cm) 10%、ローム塊 (5～20 cm) 3%、焼土 (1～5 cm) 炭化物粒 (1～5 mm) 炭化含む、焼り跡あり
6. 赤褐色土 (01R2/2) ローム状 (1～10 cm) 3%、焼土 (1～2 cm) 炭化含む、焼り跡あり
7. 黒褐色土 (01R2/2) ローム状 (1～4 cm) 20%、ローム塊 (5～20 cm) 3%、焼土 (1～3 cm) 炭化物粒 (1～2 mm) 炭化含む、焼り跡あり
8. 黒褐色土 (01R2/2) ローム状 (1～4 cm) 13%、ローム塊 (5～10 cm) 3%、焼土 (1～5 cm) 1%、炭化物粒・炭 (1～7 mm) 粘土塊 (1～5 mm) 炭化含む、焼り跡極めて強い
9. 赤褐色土 (01R2/2) ローム状 (1～4 cm) 10%、ローム塊 (5～10 cm) 3%、炭化物粒・炭 (1～5 mm) 1% 含む、焼土 (1～2 cm) 多数混入、焼り跡極めて強い
10. 黒褐色土 (01R2/2) ローム状 (1～20 cm) の混合土 5%、焼土 (1～4 cm) 炭化含む、焼り跡 (熱地帯)
11. 黒褐色土 (01R2/2) ローム状 (1～4 cm) 20%、ローム塊 (5～20 cm) 1%、焼土 (1～3 cm) 炭化物粒 (1～3 mm) 炭化含む、焼り跡あり
12. 黒褐色土 (01R2/2) ローム状 (1～4 cm) 20%、ローム塊 (5～20 cm) 1%、焼土 (1～3 cm) 炭化物粒 (1～3 mm) 炭化含む、焼り跡あり
13. 赤褐色土 (01R2/2) ローム状 (1～4 cm) 20%、ローム塊 (5～20 cm) 1%、焼土 (1～3 cm) 炭化物粒 (1～3 mm) 炭化含む、焼り跡あり
14. 赤褐色土 (01R2/2) ローム状 (1～4 cm) 20%、ローム塊 (1～3 cm) 1% 含む、焼り跡あり
15. 黒褐色土 (01R2/2) ローム状 (1～3 cm) 1%、焼土 (1～3 cm) 炭化含む、焼り跡あり
16. 赤褐色土 (01R2/2) ローム状 (1～4 cm) 20%、ローム塊 (5～20 cm) 10%、焼土 (1～3 cm) 炭化物粒 (1～3 mm) 1% 含む、焼り跡あり
17. 黒褐色土 (01R2/2) ローム状 (1～4 cm) 20%、ローム塊 (5～20 cm) 1%、焼土 (1～3 cm) 炭化物粒 (1～3 mm) 炭化含む、焼り跡あり
18. 黒褐色土 (01R2/2) ローム状 (1～4 cm) 20%、ローム塊 (1～3 cm) 1% 含む、焼り跡あり



第30图 SI-9



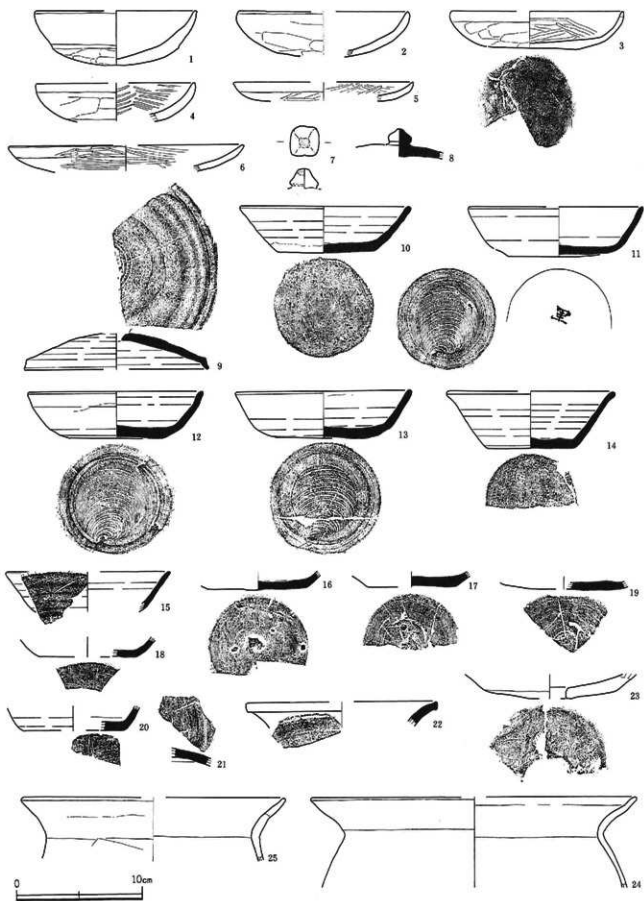
第31図 SI-9掘方



SI-9カマダ

1. 黒褐色土(OYR2/20)ローム状(1~2mm)2%, 焼土粒(1~3mm)1%, 黄白色灰(1~3mm)混在含む, 跡り強い
2. にぶい黄褐色土(OYR5/40)ローム状(1~3mm)微量, 焼土粒・灰(1~5mm)1%含む, 跡り強い
3. 暗褐色土(OYR3/20)ローム状(1~4mm)20%, 焼土粒・灰(1~6mm)2%, 灰色灰(1~2mm)10%含む, 跡り強い
4. 靱褐色土(OYR4/1)焼土粒・灰(1~5mm)10%含む, 跡り強い
5. にぶい黄褐色土(OYR5/40)焼土粒・灰(1~10mm)3%含む, 跡り強い
6. にぶい黄褐色土(OYR4/20)ローム状・灰(1~20mm)10%, 焼土粒・灰(1~10mm)・粘土粒・灰(1~20mm)1%含む, 跡り強い
7. にぶい黄褐色土(OYR4/20)ローム状・灰(1~20mm)10%, 焼土粒・灰(1~10mm)・粘土粒・灰(1~20mm)10%含む, 跡り強い
8. 暗褐色土(OYR3/20)ローム状(1~4mm)10%, 焼土粒(1~3mm)1%, 焼土粒・灰(1~6mm)3%含む, 跡り強い
9. 靱褐色土(OYR6/1)灰層
10. 黒褐色土(OYR5/40)粘土層
11. にぶい黄褐色土(OYR6/20)ローム状(1~4mm)5%, 焼土粒(1~3mm)1%含む, 跡り強い(附地層)
12. にぶい黄褐色土(OYR5/20)ローム状(1~4mm)20%, ローム層厚~30cm)10%, 焼土粒(1~3mm)・炭化物粒(1~3mm)1%含む, 跡り強い(附地層)
13. 黄褐色土(OYR4/40)粘土層(附地層)

第32図 SI-9カマダ

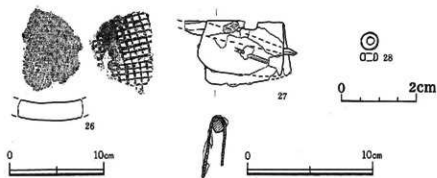


第33图 SI-9出土遺物(1)

第12表 SI-9出土遺物観察表(1)

()推定値 []現存数

No	類別 器種	大きさ (cm)		遺存度	形状・手法等	胎土、装成、色調	備 考
		口徑・器高・底径	底径				
9-1	土師器 坪	口徑 (12.8) 器高 [4.3] 底径 —	—	20%	口縁部横ナデ、体・底部ヘラ削り、内面ヘラナデ	胎土 白色、角閃石 装成 普通 色調 灰白 10YR8/2	P2マ 口縁部黒斑
9-2	土師器 坪	口徑 (13.6) 器高 [3.6] 底径 —	—	30%	体・底部ヘラ削り、内面ナデ、ウツシ処理	胎土 石灰 装成 普通 色調 灰白 10YR8/2	埋藏土1区
9-3	土師器 坪	口徑 (13.8) 器高 3.0 底径 7.4	—	40%	口縁部横ナデ、体部ヘラ削り後ミガキ、内面ミガキ	胎土 石灰、輝砂質 装成 普通 色調 赤褐 2.5YR4/6	カマド
9-4	土師器 坪	口徑 (12.6) 器高 [3.1] 底径 —	—	破片	口縁部横ナデ、体・底部ヘラ削り、内面ミガキ	胎土 白色、角閃石 装成 普通 色調 赤褐 2.5YR4/8	埋藏土2区
9-5	土師器 皿	口徑 (14.3) 器高 [1.5] 底径 —	—	破片	口縁部ミガキ、体・底部ヘラ削り後ミガキ、内面ミガキ	胎土 白色、黒色粒 装成 普通 色調 赤褐 2.5YR4/6	No.4
9-6	土師器 皿	口徑 (18.8) 器高 [2.1] 底径 —	—	破片	内外面ミガキ	胎土 白色、黒色粒 装成 普通 色調 赤褐 2.5YR4/6	埋藏土3区
9-7	土師器 蓋つまみ	口徑 — 器高 — 底径 —	—	破片	ナデ	胎土 白色、赤褐色粒 装成 普通 色調 赤褐 3YR4/6	埋藏土2区
9-8	須恵器 蓋	口徑 — 器高 — 底径 —	—	破片	ロクロ整形	胎土 白色多量 装成 普通 色調 黒灰 2.5Y3/1	埋藏土3区
9-9	須恵器 蓋	口徑 (14.6) 器高 [2.9] 底径 —	—	20%	ロクロ整形、甲を山転ヘラ削り	胎土 白色粒 8mm 装成 良好 色調 灰 N4/0	甲に「一」のヘラ記号
9-10	須恵器 坪	口徑 13.5 器高 3.7 底径 7.8	—	85%	ロクロ整形、体部下端ヘラ削り、底部一方向のヘラ削り	胎土 長石 装成 良好 色調 灰 N4/0	No.5
9-11	須恵器 坪	口徑 (13.9) 器高 4.0 底径 8.3	—	40%	粘土懸着き上げ後ロクロ整形、底部糸切り後外周回転ヘラ削り	胎土 石灰、2~3mm粒 装成 良好 色調 黄灰 2.5Y4/1~にぶい黄 2.5Y6/4	埋藏土4区 底部に「皿」黒赤
9-12	須恵器 坪	口徑 13.8 器高 3.7 底径 8.7	—	90%	粘土懸着き上げ後ロクロ整形、底部糸切り、外周回転ヘラ削り	胎土 石灰、黒色粒、2~3mm 装成 良好 色調 黒灰 10Y2/1	No.1
9-13	須恵器 坪	口徑 13.9 器高 3.8 底径 8.7	—	95%	粘土懸着き上げ後ロクロ整形、底部糸切り、外周回転ヘラ削り	胎土 石灰、黒色粒、2~3mm 装成 良好 色調 黄灰 2.5Y4/1	No.2
9-14	須恵器 坪	口徑 (13.2) 器高 4.58 底径 (7.0)	—	40%	ロクロ整形、体部下端回転ヘラ削り、底部一方向の手もちヘラ削り	胎土 白色粒 装成 良好 色調 灰 7.5Y5/1	埋藏土3区
9-15	須恵器 坪	口徑 (13.0) 器高 [3.2] 底径 —	—	破片	ロクロ整形	胎土 白色粒、4mm 装成 良好 色調 暗灰 N3/0	埋藏土3区 外面に「一」のヘラ記号
9-16	須恵器 坪	口徑 — 器高 — 底径 7.9	—	破片	ロクロ整形、底部ヘラ削り	胎土 長石、白色砂 装成 良好 色調 暗灰 N3/0	埋藏土2区、内面に自然焼成、黒い焼きの痕跡、底部中央にヘラ記号
9-17	須恵器 坪	口徑 器高 — 底径 (7.2)	—	破片	ロクロ整形、底部ヘラ削り	胎土 黒色粒、2~3mm 装成 普通 色調 灰白 10YR7/1	埋藏土2区 底部にヘラ記号
9-18	須恵器 皿	口徑 器高 0.9 底径 (7.75)	—	破片	ロクロ整形、底部ヘラ削り	胎土 石灰、2~3mm 装成 酸化 色調 にぶい黄 7.5YR6/4	埋藏土4区 外面に「X」のヘラ記号
9-19	須恵器 坪	口徑 — 器高 — 底径 (9.1)	—	破片	ロクロ整形、底部回転ヘラ削り	胎土 黒色粒、1~2mm 装成 普通 色調 灰白 2.5YR4/1	埋藏土1区 底部にヘラ記号
9-20	須恵器 坪	口徑 器高 — 底径 (7.9)	—	破片	粘土懸着き上げ後ロクロ整形、底部ヘラ削り	胎土 白色粒 装成 良好 色調 暗灰 N3/0	埋藏土3区
9-21	須恵器 皿	口徑 器高 — 底径 —	—	破片	ロクロ整形、甲を山転ヘラ削り	胎土 白色粒 装成 良好 色調 灰 7.5Y4/1	埋藏土1区 甲に「ハ」のヘラ記号
9-22	須恵器 皿	口徑 (15.2) 器高 [2.0] 底径 —	—	口辺部片	ロクロ整形	胎土 白色粒 装成 良好 色調 暗灰 N3/0	埋藏土2区 外面に「J」のヘラ記号
9-23	土師器 皿	口徑 — 器高 — 底径 (10.7)	—	破片	体・底部ヘラ削り、内面ナデ	胎土 赤褐色粒 装成 普通 色調 明赤褐 2.5YR5/6	埋藏土4区 単孔式
9-24	土師器 皿	口徑 (25.8) 器高 [7.2] 底径 —	—	口辺部片	口縁部横ナデ、体部外面横方向のヘラ削り、内面ヘラナデ	胎土 石灰、2~3mm 装成 普通 色調 黄 5YR6/6	掘方2区
9-25	土師器 皿	口徑 (20.8) 器高 [4.9] 底径 —	—	口辺部片	口縁部横ナデ、体部外面横方向のヘラ削り、内面ヘラナデ	胎土 角閃石、雲母 装成 普通 色調 明赤褐 2.5YR5/6	カマド



第34図 SI-9出土遺物(2)

第13表 SI-9出土遺物観察表(2)

No.	種別	大きさ(cm)	遺存度	整形・手法等	胎土・焼成・色調	備考
	器種	口徑・器高・底径				
9-26	瓦	全長 —	—	凸面格子タタキ、面尚有目	胎土 細砂粒, 5mm混 焼成 普通 色調 黄灰 2.5Y4/1	埋蔵土2区
	女瓦	幅 —				
		高さ —				

第14表 SI-9出土遺物観察表(3)

No.	種別	全長(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	整形・手法等			備考
	器種							
9-27	鉄製品 不明	75.0	52.0	1.0	厚さ1mmの鉄板をU形に曲げホソ穴を開けている。中に鉄線状のものが挟まれている。			
No.	種別	径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	石質	遺存度	整形・手法等	備考
器種								
9-28	石製品 白玉	4.83×4.6	1.9×1.85	1.85×2.0	滑石	100%	ロタロ整形	No.10

2. 掘立柱建物跡・小穴(第6図、第15表)

調査区内より約90基の小穴が確認されたが掘立柱建物跡として推定されたのは僅かに2棟(SB-1・2)である。しかも、それぞれ一列2間(各小穴3基)の並びを確認したに止まる。

SB-1

遺構(第35図、図版14B・C)

調査区3区の北西、A3・B3Grに所在する。南約1mにSI-4、東約2mにSI-3が隣接する。近代の溝SD-5・7と重複し、上部がこれらに切られていた。

東西2間を確認したのみで、本来の形状・規模は明確にし難い。東西辺の主軸方位はN-80°-Eを示す。

柱掘方は一辺50~70cmの方形で、深さ90~120cm。柱間は西より270+270cmで、南及び東西に展開しないことから北の調査区外に主体が所在すると推定される。

遺物は埋積土中より土器小片が出土したものの図示し得るものは無かった。

SB-2

遺構(第36図、図版14D・E)

調査区2区の中央部、D2・D3Grに所在する。西約50cmにSI-2が隣接する。新旧関係は不明。

南北2間を確認したのみで、本来の形状・規模は明確にし難い。南北辺の主軸方位はN-18°-

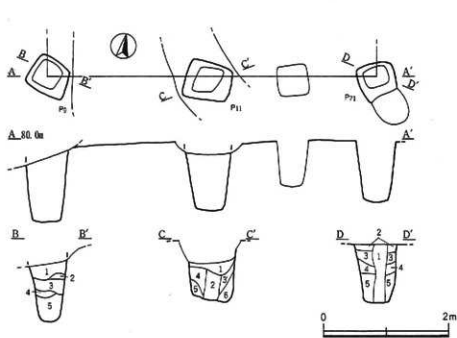
Wを示す。

柱掘方は径50～60cmの円形、深さ80～95cmで、底面は2段に掘り込まれていた。柱間は北より235+225cm、東西に展開せず、南と北に延びる可能性が高いが、調査範囲の制約から判然としなない。

埋積土中より土師器片の出土があったが、図示し得るものは無かった。

他の小穴については第15表に計測値を示した。いずれも古代以降の所産と推定され、中世のものが混在すると考えられるが、遺物や埋積土の明確な違い等により抽出することは出来なかった。径30～40cm、深さ20～50cm程のものが多く、径50～70cm、深さ26～110cmと幾分大振りのものも一定数見られる。

平面形は円形もしくは楕円形のものが多いが、少数ながら方形のものも混在する。 (水野)



第35図 SB-1

P-9(SB-1)

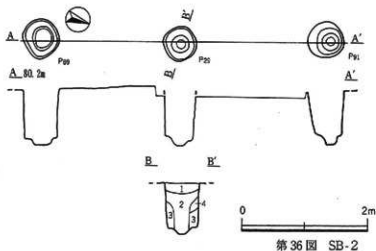
1. 黒褐色土(0YR2/2)ローム殻(1～4cm)20%、ローム殻(5～15cm)1%含む、締り堅
2. ローム殻(10～15cm)の混合土5%、締り堅
3. 暗褐色土(0YR3/2)ローム殻(1～4cm)10%、ローム殻(5～30cm)1%含む、締り堅
4. ローム殻(5～10cm)弱
5. 暗褐色土(0YR3/2)ローム殻(1～4cm)20%、ローム殻(5～10cm)1%含む、締り堅

P-11(SB-1)

1. 黒褐色土(0YR2/2)ローム殻(1～4cm)3%、ローム殻(5～10cm)1%含む、締り堅
2. 黒色土(0YR2/1)ローム殻(1～3cm)3%含む、締り弱い
3. 黒褐色土(0YR3/2)ローム殻(1～4cm)3%、ローム殻(5～7cm)1%含む、締り強い
4. 暗褐色土(0YR3/2)ローム殻(1～4cm)10%、ローム殻(5～20cm)10%含む、締り堅
5. 暗褐色土(0YR3/2)とローム殻(10～15cm)の混合土5%、締り堅
6. 黒褐色土(0YR2/2)ローム殻(1～4cm)1%、ローム殻(5～20cm)3%含む、締り堅

P-71(SB-1)

1. 黒褐色土(0YR2/2)ローム殻(1～4cm)20%含む、締り堅
2. 暗褐色土(0YR3/2)ローム殻(1～4cm)3%、粘土殻(1～3cm)微量含む、締り強い
3. 黒色土(0YR2/1)ローム殻(1～4cm)30%、ローム殻(5～70cm)3%含む、締り弱い
4. 暗褐色土(0YR3/2)ローム殻(1～4cm)20%、ローム殻(5～10cm)3%含む、締り堅
5. 暗褐色土(0YR3/2)ローム殻(1～4cm)10%、ローム殻(5～10cm)3%含む、締り堅



第36図 SB-2

P-29(SB-2)

1. 暗褐色土(0YR2/2)とローム殻(10～15cm)の混合土6%、締り強い
2. 黒色土(0YR2/1)ローム殻(1～4cm)3%含む、締り強い
3. 暗褐色土(0YR3/2)とローム殻(1～20cm)の混合土5%、締り強い
4. 明灰褐色土(0YR4/6)、締り強い

第15表 小穴計測表

単位cm、() 現存値、[] 確認面からの推定

No.	Gr	東西長	南北長	深さ	備考	No.	Gr	東西長	南北長	深さ	備考
1	C2	50	50	27	3区	46	C3	20	25	10	3区
2A	C2	(35)	57	19	3区, 互いに切り合う	47	C3	40	55	59	3区, 方形
2B	C2	35	65	30	3区, 互いに切り合う	48	B3	65	65	7	3区, SI-3を切る
3	欠					49	C3	45	55	57	3区, P58と切り合う, 楕円形
4	A3	40	40	30	3区, SD-6に切られる	50	C3	30	30	8	3区, SD-6に切られる
5	A3	25	25	28	3区, SD-6に切られる	51	欠				
6	A3	50	50	54	3区	52	C3	50	50	69	3区, SD-6に切られる
7	A3	45	40	48	3区, SD-3に切られる	53	C3	(20)	20	13	3区, SD-6に切られ, P54と切り合う, 楕円形
8	A3	25	25	27	3区, SD-5に切られる	54	C3	30	30	25	3区, SD-6, P53と切り合う
9	A3	65	55	115	3区, SD-5に切られる, SB-1	55	C3	50	60	61	3区, SD-6に切られる, 楕円形
10	A4	40	40	38	3区, SD-4に切られる, 方形	56	C3	45	50	86	3区, 楕円形
11	A3	73	60	110	3区, SD-4に切られる, SB-1	57	C3	48	52	31	3区, 楕円形
12	欠					58	C3	(45)	55	27	3区, P49と切り合う, 楕円形
13	A3	50	50	75	3区, 方形	59	A3	30	35	23	3区, SD-5に切られる
14	A3	40	(18)	39	3区, SI-4を切る	60	G6	58	58	16	1区
15	B3	20	25	21	3区	61	G6	35	35	14	1区
16	C3	30	30	40	3区	62	G7	66	66	32	1区, P63と切り合う
17	C3	35	35	10	3区	63	G7	30	30	21	1区, P62と切り合う
18	C3	30	30	38	3区	64	G7	50	50	42	1区
19	C3	40	40	73	3区	65	F7	70	70	26	1区, P67と切り合う
20A	C3	(25)	(50)	24	3区, 互いに切り合う	66	欠				
20B	C3	42	58	83	3区, 互いに切り合う	67	F7	32	32	41	1区, P65と切り合う
21	C3	40	40	5	3区, SD-6, SI-9カマドとに切られる	68	F7	30	30	35	1区
22A	C3	50	(20)	61	3区, SD-6に切られる	69	F7	20	20	25	1区
22B	C3	40	(28)	34	3区, SD-6に切られる	70	B3	68	60	33	3区
23	欠					71	B3	60	(50)	98	3区, P84と切り合う, SB-1
24	B4	80	90	66	3区	72	C2	50	(35)	23	3区, SD-7に切られる
25	C4	65	65	14	3区	73	C2	50	50	25	3区, SD-7に切られる
26	C4	82	82	21	3区	74	C2	35	35	27	3区
27	B2	40	35	[86]	3区, SI-8を切る	75	B2	35	35	32	3区, P45と切り合う
28	B2	35	35	[72]	3区, SI-8を切る	76	A3	50	45	65	3区, SK-2と切り合う
29	D2	55	50	81	2区, SB-2	77	A3	35	43	30	3区
30	E2	30	33	15	2区	78	B4	45	45	23	3区
31	欠					79	C4	70	70	74	3区
32	B3	35	35		3区, SI-5を切る	80	C4	60	60	63	3区
33	B3	25	25	10	3区, SI-5を切る	81	C4	58	50	27	3区, 楕円形
34	B3	25	25	10	3区, SI-5を切る	82	C4	58	52	38	3区, 楕円形
35	B3	25	25	10	3区, SI-5を切る	83	C4	50	50	30	3区
36	B3	20	20	5	3区, SI-5を切る	84	B3	50	(55)	51	3区, P71と切り合う, 楕円形
37	B2	25	25	65	3区, SI-5を切る	85	C4	45	45	113	3区
38	B2	40	40	5	3区, SI-8を切る	86A	C4	40	40	63	3区, 互いに切り合う
39	B2	40	40	10	3区, SI-8を切る	86B	C4	35	35	63	3区, 互いに切り合う
40	B2	30	30	40	3区, SI-8を切る	87	D3	(28)	42	61	2区, 西半分は区外
41	C2	30	30	20	3区, SI-9掘削で消滅	88	E3	50	50	33	2区
42	C2	30	30	10	3区, SI-9掘削で消滅	89	D2	63	60	87	2区, SB-2
43	C2	30	30	10	3区, SI-9掘削で消滅	90	D2	60	60	17	
44	C3	30	30	20	3区, SI-9掘削で消滅	91	D3	58	58	92	2区, SB-2
45	B2	25	50	34	3区, P75と切り合う, 楕円形	92	E2	82	60	25	2区, 楕円形

3. 土坑

調査区3区において2基確認したが、遺物の出土も無く明確な時期、性格は判然としない。

SK-1

遺構 (第37図、図版15A)

調査区3区の北西部、A3・B3Grに跨って所在する。北にSB-1、南にSI-4が接するように隣接する。上部が近代の溝SD-7に切られていた。

平面形・規模は、開口部が径約90×95cmの円形、深さ35cmで壁はやや外傾し、底面も径75×80cmの円形で鍋底状である。

埋積土は単層で自然埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

SK-2

遺構 (第37図、図版15B)

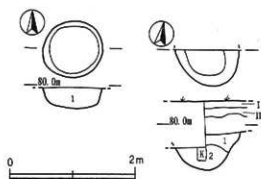
調査区3区西端の北寄り、A3Grに所在する。西半部は調査区外に延びる。南東約3mにSI-5が隣接し、近代の溝(SD-3)に上部が切られていた。北東はP96と接するが新旧関係は不明である。

平面形・規模は、前記の状況から明確にし難いが、開口部は現存の南北長104cm、現存東西長が55cm、本来は径100cmの円形もしくは楕円形と推定される。深さ55cmで、底面は中央に向かってやや凹む。

埋積土は2層に分けられ、自然埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

(水野)



SK-1

1. 黒褐色土(0YR2/2)ローム状(1~4cm)20%、ローム塊(5~15cm)1%含む、粘り強い

SK-2

1. 黒褐色土(0YR2/2)ローム状(1~4cm)1%、ローム塊(5~10cm)1%含む、粘り強い
2. 暗褐色土(0YR3/2)ローム状(1~4cm)5%、ローム塊(5~20cm)1%含む、粘り強い

第37図 SK-1・2

4. 溝跡

調査区の3区では計7条の溝跡を確認し、このうち6条が南北溝 (SD-1～5、7)、1条が東西溝 (SD-6)であった。しかし、南北溝はいずれも埋積土、断面形状、出土遺物から近代の溝と判断され調査対象から除外した。

SD-6

遺構 (第39図、図版15F～H)

調査区3区の中程を東西に延び、A3～C3Grに跨って所在する。SI-5・9を切り、SD-3・5に切られていた。東・西両端は調査区内に延び、調査区内にはこれに連なる溝は無かった。中軸線の方位はN-87°30'-Eを示す。

上幅は130～190cm、深さ15～25cm、壁はやや外傾し、底面は幅80～120cmで断面が鍋底状。

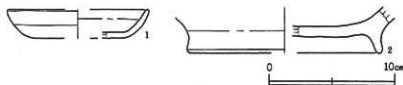
埋積土は2～3層に分けられ、自然埋没である。

遺物は埋積土中より、土師器片の他、中世土師器皿、炆器鉢の破片が出土した。

遺物 (第38図、第16表、図版23)

非ロクロの中世土師器皿 (1)、炆器鉢 (2) の破片が各1点出土した。1の中世土師器皿は白色で焼成が硬質であり所謂「白かわらけ」と考えられる。2の鉢は高い高台をもち、内面の底部に降灰による自然釉が見られる。

(水野)

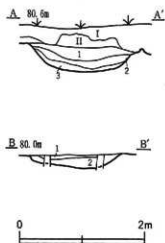
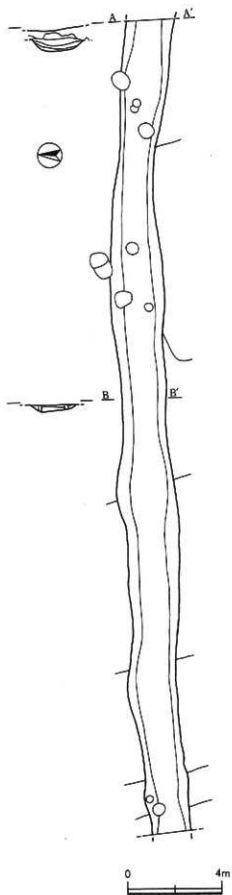


第38図 SD-6出土遺物

第16表 SD-6出土遺物観察表

() 推定値 [] 保存値

No.	種別	大きさ (cm)		取付痕	形状・手法等	胎土、焼成、色調	備考
	器種	口径・通高・底径	口径				
D6-1	中世土師器 (かわらけ) 皿	口径 (11.1) 器高 2.3 底径 (7.1)		破片	内外面ナデ、非ロクロ	胎土 稍長 焼成 良好 色調 白	
D6-2	炆器 鉢	口径 — 器高 [3.7] 底径 (15.2)		底器片	底部付高台	胎土 石英 焼成 良好 色調 によい垂釉 STR4/4	No.1 常滑 内面磨滅



SD-6A-A'

1. 黄褐色土(10YR2/2)ロ-A粒(1~10mm)部分的混入, 締り強(黄土)
- II. 暗褐色土(10YR2/2)ロ-A粒(1~2mm)3%含む, 締り強(黄土)
1. 黄褐色土(10YR2/2)ロ-A粒-塊(1~6mm)10%含む, 締り強だが酸化
2. 黄褐色土(10YR2/2)ロ-A粒-塊(1~10mm)30%含む, 締り強
3. 黄褐色土(10YR2/2)ロ-A粒(1~2mm)50%, ロ-A塊(1~10mm)10%含む, 締り強

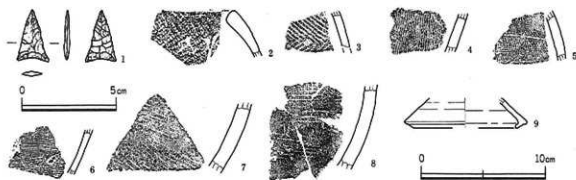
SD-6B-B'

1. 暗色土(10YR2/1)ロ-A粒(1~2mm)5%含む, 締り強だが薄層半分は酸化面
2. 暗褐色土(10YR2/2)ロ-A粒(1~2mm)5%含む, 締り強

第39図 SD-6

5. 調査区内出土遺物 (第40図、第17表、図版23)

今次調査区では、縄文時代、弥生時代、古墳前・中期の遺構は確認出来なかったが、後世の住居跡などから極少量ながら、石鏃(1)、縄文土器(2)、弥生土器(3)、古式土師(4~8)が出土した。また、遺構に伴わないが、カエリを持つ須恵器蓋(9)などもある。



第40図 調査区内出土遺物

第17表 調査区内出土遺物観察表

() 推定数 [] 現存数

No.	種別 器種	大きさ (cm) 口徑・器高・底径	遺存数	形状・手法等	胎土、焼成、色調	備考
1	石器 鏃	長さ 2.7 幅 1.6 厚さ 0.3	100%		胎土 一 焼成 一 色調 一	SI-3, 埴輪土 団基型, チョート製
2	縄文 埴輪	口徑 一 器高 一 底径 一	破片	円形の拭線により文様意匠し、地文に組文を羽状に施す	胎土 角閃石 焼成 普通 色調 明赤褐 7.YR5/6	SI-9, 埴輪土1区
3	弥生 埴輪	口徑 一 器高 一 底径 一	破片	付着炎2種の縄文を羽状に施す	胎土 石英, 雲母 焼成 普通 色調 褐 7.SYR4/3	SI-4, 埴輪土2区
4	土師器 埴輪	口徑 一 器高 一 底径 一	破片	外面ハケ目, 内面ヘラナゲ	胎土 長石, 2~3mm濃 焼成 普通 色調 にぶい赤褐 2.SYR4/3	SI-8, 埴輪土1区
5	土師器 埴輪	口徑 一 器高 一 底径 一	破片	外面に多方向のハケ目	胎土 石英, 角閃石 焼成 普通 色調 橙 7.SYR5/6	SI-8, 埴輪土4区
6	土師器 埴輪	口徑 一 器高 一 底径 一	破片	外面ハケ目, 内面ヘラナゲ	胎土 長石, 角閃石 焼成 普通 色調 赤褐 5YR4/6	試掘 Tr 5
7	土師器 埴輪	口徑 一 器高 一 底径 一	破片	外面ハケ目後ミガキ, 内面ヘラナゲ	胎土 石英, 輝砂配 焼成 普通 色調 明褐 7.SYR5/6	SI-1, 埴輪土2区
8	土師器 埴輪	口徑 一 器高 一 底径 一	破片	外面ハケ目後ミガキ, 内面ヘラナゲ	胎土 石英, 長石, 輝砂配 焼成 普通 色調 明褐 7.SYR5/6	SI-1, 埴輪土2区
9	須恵器 蓋	口徑 (8.3) 器高 [2.4] 底径 一	口辺部片	ロクロ整形, 口辺にカエリを持つ	胎土 白色砂 焼成 普通 色調 灰 7.SY4/1	試掘 Tr 6

IV 総括

今次調査は、約2100m²の開発予定地のうち、試掘調査によって遺構が確認された範囲で現状保存が不可能な部分3ヶ所の計約600m²が対象となった。先に実施した試掘調査では、古代の竪穴住居跡9軒、溝跡6条、土坑1基などが想定された。

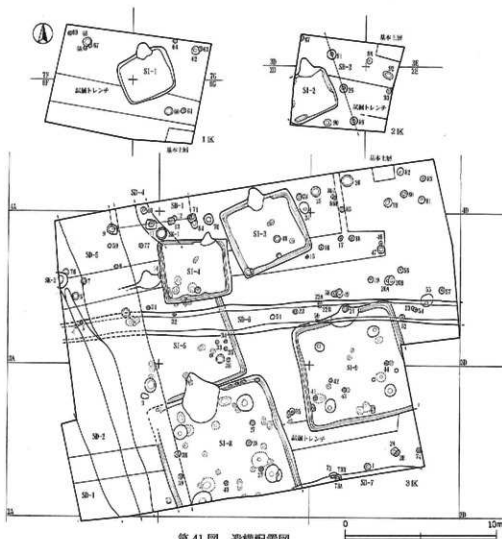
発掘調査の結果、古墳時代末葉から平安時代前葉の竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡2棟と柱穴状の小穴約90基、土坑2基を確認した。また、溝跡を計7条確認したが、東西溝のSD-6が中世の所産と推定された他は、いずれも近・現代のものと判断されることから調査対象から除外した。調査成果を要約し、総括とする。

1. 土地利用の変遷

旧石器時代 今次調査及び過去の調査においてもこの時代の遺構・遺物は確認されなかった。

縄文時代 過去の調査では遺構・遺物とも認められず、今次調査でも遺構の確認は無かったが、後世の遺構内より土器片1点と石鏃が1点出土した。何らかの土地利用の存在が知られる。

弥生時代 該期の遺構は認められなかったが、土器片が1点のみ出土している。



第41図 遺構配置図

古墳時代前・中期 この時期の遺構は確認出来なかったものの、後世の住居跡内より該期の土師器片が数点出土している。縄文時代・弥生時代に比べ破片数が多いことから、近隣に何らかの遺構が存在したものと推察される。

古代 明確に集落（堅穴住居）が営まれるようになるのは古墳時代末葉の7世紀中葉以降と考えられ、奈良時代から平安時代初めには隆盛するが、その後消滅する。

今回調査した住居跡の内、古墳時代末葉のSI-5、奈良時代前葉のSI-8は一辺8m以上と大型で、2～3度の建て替え拡張が繰り返されていたことが確認された。また、SI-8の東に隣接する奈良時代中・後葉のSI-9も一辺7mと、該期としては大型の住居である。しかし、他の4軒は一辺3～5mと一般的な規模であった。これら的大型住居跡はそれぞれが建て替え拡張の行為から、同じ位置で長期間にわたって利用されたわけである。また、同時併存では無く時期を遅えているが、近隣あるいは重複して構築されていることから、占地に対して何らかの制約が存在した感を受ける。

なお、調査区内より約90基の柱穴状の小穴を確認した。しかし、掘立柱建物跡を想定出来たのは僅かに2棟で、それぞれ2間の一列、各3本づつの柱並びを確認したに過ぎず、建物の規模・形状は判然としない。

中世 この後、土地利用の痕跡が認められるのは中世で、3区中央を東西に延びる幅1.3～1.9m、深さ15～25cmの溝跡SD-6である。溝内より鎌倉期と推定される灰器鉢、中世土師器皿などが出土している。

他に該期の遺構・遺物を確認出来なかったが、近隣の畑でも灰器甕の底部片が採集されており、性格は定かではないが中世の土地利用も広範囲に及ぶと推察される。なお、前記の約90基の小穴の中には該期に属するものが存在する可能性が高いが、今次調査ではそれを明確にすることが出来なかった。

近・現代 前述の如く、3区の西寄りでも多数の南北溝を確認した。規模の大きなものでは上幅2m、深さ1.6m程もあり、埋積土も比較的締っていたことから当初は中世の堀跡かと思われた。しかし、調査の進捗に伴い、埋積土の途中より農業用のビニール製品や近・現代の陶磁器片が出土し、SD-2は底面より戦時中の代用品として焼かれた陶製の小判形の湯たんぼの破片が出土し、近・現代の所産と判明した。他の南北溝も断面形や埋積土から類似の溝と判断された。耕作地の区画や根切溝としては規模が大きいかと思われるが、性格は不明と言わざるを得ない。

2. 特色ある遺構と遺物

遺構 調査した7軒の堅穴住居跡のうち、SI-1は北東の1区、SI-2は南東の2区、他の5軒は3区で確認された。2区と3区は近接しており、遺構の分布状況からこの間の未調査部分にも堅穴住居跡が存在する可能性が高い。しかし、1区のSI-1はSI-2の北方約45mに確認されたもので、試掘調査においても付近に堅穴住居跡は確認されておらず、単独で所在するように思われる。3区では、重複あるいは近接して所在するのに対して、やや異なる分布状態を示す。

なお、SI-1は8世紀前半代と推定されるが、確認面より9世紀初め頃の完形の土師器甕が出土しており、別の遺構の存在を伺わせる。

堅穴住居跡には全てカマドが設けられており、いずれも北壁に築かれていた。なお、北壁の中央部に設けられたもの（SI-3・5・8・9）と、東寄りに設けられたもの（SI-1・2・4）とがある。

主軸方位はN-6°-W～N-28°-Wに限られ、うち5軒（SI-1・2・3・5・8）はN-23°-W～N-28°-Wに集中する。

規模は、9～10.8㎡のSI-1・2、21.5～22.5㎡のSI-3・4、50～69㎡のSI-5・8・9の大・中・小に大別される。大型の3軒は4本の支柱穴と出入口用の梯子穴が認められたが、中・小型の竪穴では梯子穴のみが確認された。いずれにも明確な貯蔵穴は認められなかったが、唯一SI-5は拡張途中の段階でカマドの右脇に設けられていた可能性をもつ。

また、SI-8の北辺の壁及び壁溝内には壁柱穴と見られる小穴が多数認められた。該期的大型住居跡では四方の壁に壁柱穴が設けられることが多いが、本跡は東・西壁には認められず、南壁は調査区外にあって確認出来ず、北辺のみ、もしくは北・南辺に設けられていたと推察する。なお、比較的多数の小穴が認められたのは、建て替え拡張に際して北壁の位置を変えずにいたと考えられ、カマド袖部の両脇に設けられた小穴にも数次の重複が認められることと符合する。

SI-5・8は床面下の調査で多数の支柱穴が確認され、建て替え拡張が判明した。SI-5は3回以上、SI-8は2回以上の建て替えが推察され、これらの建て替え拡張によってSI-5は当初の約25㎡から約64㎡(約2.6倍)、SI-8は当初の約53㎡から72㎡(1.4倍)に面積が増加した。

また、古い支柱穴の配置を見ると、SI-5・8ともに、南東・南西の柱穴は竪穴の対角線に沿って移設するが、北東・北西の柱穴は外(東と西)に向かって移設することにより、カマドのある北壁の位置を変えずに拡張したことが判る。しかし、SI-5は最終段階には北東・北西の柱穴も対角線上に移設して北壁も北へ移動したと考えられ、これに伴いカマドも移築された。

さらに、SI-4は東辺、SI-9は南辺で古い壁溝が確認されており、小規模な改造が行われたと見られる。

なお、拡張に際してSI-5は床面の高さを嵩上げした為複数の壁溝が認められたが、SI-8は同じ高さで床面を設けたと思われ、古い壁溝を確認することが出来なかった。

カマドは前述の如く、いずれも北壁を切り込んで白色粘土で築かれていたが、住居の廃絶に伴い破壊儀礼を行った為か全体に遺存状態が悪く、支脚の遺存するものも無かった。

なお、SI-3と4はカマドの構築(補強)材として壁瓦が使用されていた。SI-3は女瓦のみ、SI-4は男瓦のみを利用し、焚口部等の補強を目的としたと思われる。SI-3では11片6個体分の女瓦が出土し、ほぼ完形のを割って袖部に埋め込んでいる状況が認められた。SI-4は10片5個体分の男瓦が出土したものの、焚口部は破壊が著しく、使用状況は確認出来なかった。このうち4点は製作手法、焼成状態などから同一産地(宇都宮窯跡群)と判断され、いずれにも人名と見られる文字がへら書きされていた。これらはいずれも狭端部を欠損しており、同様の使用方法で用いられたものと推察される。また、文字は広端部側に銘記されていた為に遺存したと思われるが、当時の人々にとっては文字通り「瓦礫」としての存在であり、偶然とすればいかに文字瓦の占める割合が高かったかが窺い知られる。逆にSI-3の女瓦のようにほぼ完形に近いものでも文字が認められないものもあり、100%の記銘率では無かったことが判る。

調査した7軒のうち、SI-3・9では竪穴内の所々に焼土や炭化物(材)が遺存し、火災住居跡の可能性はある。SI-3は前述の如く、瓦を補強材にしたカマドの一部が破壊された状態であり、完形の土器類の遺存が見られなかったことから、住居の廃絶に際して不用材の焼却処分を行ったと思われたが、刀子4点、鏃2点の計6点の鉄製品や完形の石製紡錘車、被熱した砥石などが出土しており、居住中に火災に遭った可能性が高い。火災の後に若干の片付けとカマドの破壊儀礼を行ったものであろうか。

SI-9もカマドが破壊を受けており、焼土や炭化物の移存が少ないことから住居の廃絶に伴う不用材の焼却処理と思われたが、この住居跡では完形に近い須恵器が数点出土し、性格不明の鉄製品や径4.6mm程の小振りな白玉が1点出土した。これらのことから、本跡も居住中の火災かと思われる。なお、出土した須恵器の坏の

底部に「里」の墨書が銘記されたものが1点見られた。

掘立柱建物跡については前述の如く、約90基の柱穴状の小穴を確認したが、調査区が細かく分散し、最も広い3区では竪穴住居跡や後世の溝が密集するなどの制約もあり、全体の規模・形状を確認できたものは無い。僅かに構造物と推定したSB-1・2についてもそれぞれ2間一列で3本の柱並びを確認したに過ぎない。3区北西のSB-1は北側の地区外に延びると推察され、2区のSB-2も地区外に延びると推定された。

なお、それぞれの柱掘方を見るとSB-1は方形を基調とする平面形であるのに対し、SB-2は円形であった。平面形の違いが時期差を示すものか否かは判然としない。しかし、SB-1が一辺50～70cm、SB-2は径50～60cmであるのに対し深さは80～120cmと、ともに平面規模に対し深さが著しいのが特徴的である。柱間はSB-1が270cmで約9尺、SB-2が225～235cmで約7.5～8尺と柱掘方の平面規模の割に柱間が広い為、深くしたものであろうか。

これら以外の小穴でも第15表に示した通り、方形を基調とするものと円形を基調とするものが混在し、深さが平面規模の1.5倍以上となるものが多く見られた。

埴土中の遺物は古代の土師器、須恵器のみであったが、あるいは中世に属するものが混在する可能性も否めない。

遺物 今次調査では縄文時代から近・現代まで多岐にわたる遺物が出土したが、その中で主体を占めるのは古代の土師器と須恵器である。該期の遺物はこの他に瓦（男瓦・女瓦）、鉄製品（刀子、鏃、不明製品）、石製品（紡錘車、砥石、白玉）、ガラス小玉なども見られた。

土師器は坏、碗、蓋、皿、鉢、甌、台付甕、壺などがあり、SI-2から「+」の墨書が銘記された坏が1点（1）出土している。奈良時代の坏、碗、皿類には橙色に焼上がる胎土を用いたものが多く見られた。また、SI-1の確認面やSI-3・4からは内面に黒色処理を施した坏類（1-5、3-1、4-1）が出土した。

蓋はツマミ部分のみの出土であるが、SI-9より四角錐のピラミッド状のもの（7）があり、南方約1kmの西下谷田遺跡からも類似のものが出土している。さらに、SI-8からは、器形は定かでないが、畿内産と思われる土師器（9）が出土した。甕類は所謂「武蔵型」と「下野型（常総型）」とが同じ住居跡で混在する。須恵器は蓋、坏、高台坏、高盤、壺、甕などがある。

今次調査区内ではSI-5出土の蓋（8）が最も旧く、調査区内出土遺物（9）の蓋がこれに次ぐ。これらから、7世紀中葉から後葉には集落が営まれていたものと推察される。

奈良時代には、胎土、製作手法から多くの産地の製品の使用が見られる。特徴的な坏類の底部を見ると、糸切り、糸切り後外周へラ削り、へら起し、へら起し後手持ちへラ削り、全面へラ削りなどがある。地元宇都宮窯跡群を中心に、益子窯跡群、三島窯跡群の他茨城産や東海産と見られるものもある。

SI-9からは坏、蓋、壺などにへら記号の記されたものが9点程出土した（9・15～22）。坏類は底部外面と体部外面、蓋は甲、壺は口辺部外面に記されているが、残念ながらいずれも破片の為、記号全体が判るものは僅かであった。

SI-2からは高い台脚部に長方形の透かし孔を穿った高盤（5）が出土した。宇都宮窯跡群広表窯跡からも長方形の透かし孔をもつ盤が出土しているものの、台脚端部の形状が異なるようである。

また、SI-9から坏の底部外面に「里」の墨書が銘記されたもの（9）が出土したが、単一文字であり、人名、地名、役職名の一部と思われるが、いずれとも断定し難い。さらに、SI-4の須恵器坏の体部外面には「王」もしくは「玉」と見られる墨書が記されていた。

瓦類は、前述の如く、カマドの構築（補強）材等の目的で集落内に持ち込まれたもので、SI-3・4の他、SI-2・

8・9の埋積土中よりも女瓦片が出土したが、鏡瓦や宇瓦などは認められなかった。これらは、宇都宮竈跡群の水道山瓦窯跡群、根瓦窯跡の製品と考えられる。本来の供給先は本遺跡の南方約1kmに所在する上神主・茂原官衙遺跡の瓦葺正倉と考えられるSB-1と判断される。これらの瓦の制作時期は740年～757年と推定されており、本集落へは上神主・茂原官衙遺跡よりもたらされたと推察される。この上神主・茂原遺跡の西方約0.8kmに所在する西下谷田遺跡では8世紀中葉の土器と共伴するとのことであり、建物の造営に際してもたらされたと考えられる。

しかし、本遺跡をはじめとする近隣の集落へは建物の補修あるいは倒壊によってもたらされたとされる。SI-3のほぼ完形に復元できた女瓦(12)を見ると破損品では無く完形の状態でも集落に持ち込まれたと判断される。なお、この女瓦は格子文の押型(格子タタキ)による分類では多功遺跡の53(上神主・茂原官衙遺跡はこれを緩用する)、水道山瓦窯跡群2、園分僧寺の225Bとされるもので、上神主・茂原官衙遺跡では格子文押型の女瓦中0.7%の出土率という。SI-3からはこれと同一の押型のものがもう1片(13)出土している。また、SI-3からはさらに出土率が低い縄タタキによる女瓦片も数片出土した(14)。

男瓦はSI-4からのみの出土であり、5点のうち4点に人名と見られる文字がヘラ書きされていた。銘記された文字は、「雀部小酒」2点(8・11)、「文部臣」(10)、「鳥」(9)で、いずれも上神主・茂原官衙遺跡に類例が見られる。このうち、8・10・11は凹面の布目痕の下に素材粘土切り離し時の糸切痕が認められ、11は凸面の一部に布目痕が認められた。

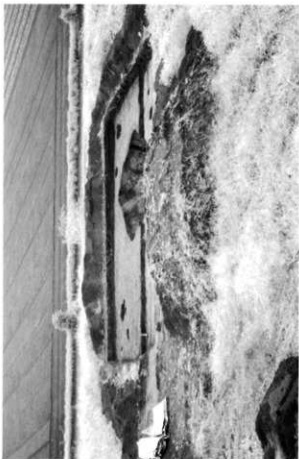
鉄製品は刀子4点・鍔4点の他不明品が1点SI-9より出土した。これは長方形の板をU字形に折り曲げたもので、折り曲げた部分の中央に長方形の窓がある。また、折り曲げた間には鉄鍔状の断面方形の鉄棒が挟まれていた。錠前かとも思われるが確証も無く、不明品とした。

中世の遺物は、SD-6より出土の中世土師器皿(1)と炆器鉢(2)の僅かに2点であった。中世土師器皿は非クロコ整形の白カワラケであり、市内では宇都宮城跡などに類例が見られる程度で稀少な資料である。

本書の上梓にあたり、調査に対してご理解を賜りました事業主の(故)今井 実氏と御令閨陽子氏の学術に対する理解を高く評価するとともに、大東建託株式会社をはじめ、調査・報告書作成についてご助力とご指導を賜りました関係各位及び機関に深謝申し上げる次第である。

参考・引用文献

1. 大川 清 1978 『水道山瓦屋』 考古学研究室報告甲種第2冊 国士館大学文学部考古学研究室
2. 篠原祐一・津野 仁・田代己佳他 1993 『広表窯跡 付欠ノ下遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告書第131集 栃木県教育委員会
3. 秋元陽光・保坂知子 1997 『多功遺跡Ⅲ』 上三川町埋蔵文化財調査報告第16集 上三川町教育委員会
4. 栃木県教育委員会 1997 『栃木県埋蔵文化財地図』
5. 宇都宮市教育委員会 1997 『宇都宮市埋蔵文化財地図』
6. 山口耕一・及川真紀・篠原睦美 1999 『多功南原遺跡Ⅰ～Ⅲ』 栃木県埋蔵文化財調査報告第222集 栃木県教育委員会 (財) 栃木文化振興事業団
7. 安永真一 2001 『上神主・茂原 茂原向原 北原東』 栃木県埋蔵文化財調査報告第256集 栃木県教育委員会 (財) とちぎ生涯学習文化財団
8. 板橋正幸・田熊清彦 2003 『西下谷田遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告第273集 栃木県教育委員会 (財) とちぎ生涯学習文化財団
9. 梁木 誠・深谷 昇・田熊清彦 2003 『上神主・茂原官衛遺跡』 上三川町埋蔵文化財調査報告第27集・宇都宮市埋蔵文化財調査報告第47集 上三川町教育委員会、宇都宮市教育委員会
10. 今平利幸 2009 『城館跡の調査からみた中世の宇都宮』 『東国の中世遺跡—遺跡と遺物様相—』 随相舎
11. 水野順敏・新井 潔 2014 『茂原北原遺跡 (B区)』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第83集 宇都宮市教育委員会



A. 1区全景 (南より)



B. 2区全景 (北より)



C. 3区全景 (東より)



D. 3区西半部 (東より)



A. 調査前遠景（北より）



B. 調査前近景（南西より）



C. 調査前近景（北東より）



D. 調査前近景（南より）



E. SI-1 東西土層（南より）



F. SI-1 完掘（南より）



G. SI-1 掘方南北土層（東より）



H. SI-1 掘方（南より）



A SI-1 カマド完掘 (南より)



B SI-1 カマド掘方 (南より)



C SI-1 遺物出土状態 (南より)



D SI-1 遺物出土状態 (南より)



E SI-2 東西土層 (南より)



F SI-2 完掘 (南より)



G SI-2 掘方 (北より)



H SI-2 掘方 (南より)



A SI-2 カマド完掘 (南より)



B SI-2 カマド南北土層 (東より)



C SI-2 カマド掘方 (南より)



D SI-2 遺物出土状態 (南より)



E SI-2 遺物出土状態 (南より)



F SI-2 遺物出土状態 (南より)



G SI-3 南北土層 (東より)



H SI-3 完掘 (東より)



A. SI-3完掘 (南より)



B. SI-3掘方 (南より)



C. SI-3掘方 (東より)



D. SI-3カマド南北土層 (南東より)



E. SI-3カマド東西土層 (南より)



F. SI-3カマド完掘 (南より)



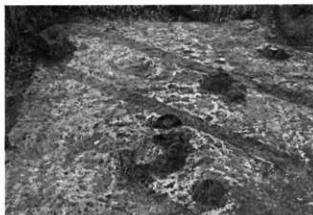
G. SI-3カマド南北土層 (南東より)



H. SI-3カマド掘方 (南より)



A SI-3 カマド付近遺物出土状態 (西より)



B SI-3 炭化物出土状態 (南より)



C SI-4 東西土層 (南より)



D SI-4 南北土層 (東より)



E SI-4 完掘 (南より)



F SI-4 完掘 (西より)



G SI-4 掘方 (南より)



H SI-4 掘方南北土層 (南より)



A SI-4 カマド東西土層 (南より)



B SI-4 カマド南北土層 (東より)



C SI-4 カマド遺物出土状態 (南より)



D SI-4 カマド遺物出土状態 (南より)



E SI-4 カマド掘方 (南より)



F SI-4 遺物出土状態 (南より)



G SI-4 遺物出土状態 (南西より)



H SI-4 遺物出土状態 (南より)



A SI-5 東西土層 (北より)



B SI-5 完掘 (東より)



C SI-5 完掘 (南より)



D SI-5 掘方 (東より)



E SI-5 掘方東西土層 (南東より)



F SI-5 掘方 (南より)



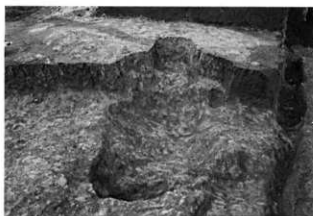
G SI-5 カマド掘方南北土層 (東より)



H SI-5 カマド掘方東西土層 (南より)



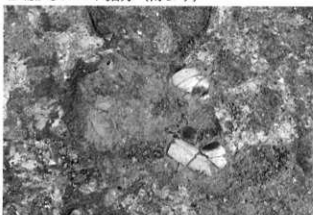
A SI-5カマド完掘 (南より)



B SI-5カマド掘方 (南より)



C SI-5鉄製品出土状態 (南より)



D SI-5遺物出土状態 (南より)



E SI-8東西土層 (南東より)



F SI-8東西土層 (南より)



G SI-8完掘 (東より)



H SI-8完掘 (北東より)



A. SI-8 掘方 (東より)



B. SI-8 掘方 (北より)



C. SI-8 掘方東西土層 (南西より)



D. SI-8 掘方東西土層 (南より)



E. SI-8 カマド 南北土層 (東より)



F. SI-8 カマド 東西土層 (南より)



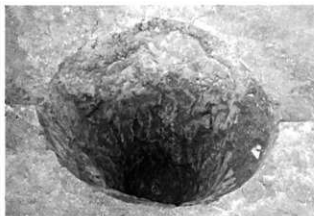
G. SI-8 カマド 完掘 (南より)



H. SI-8 カマド 掘方完掘 (南より)



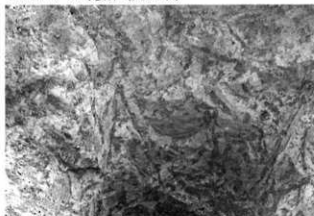
A SI-8 P1 東西土層 (北より)



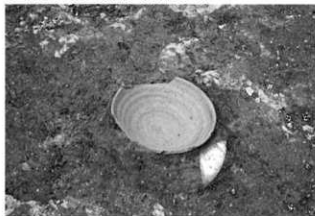
B SI-8 P1 完掘 (南より)



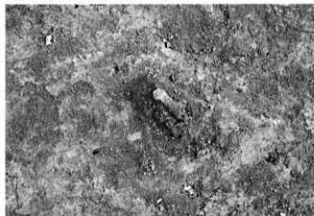
C SI-8 P9 工具痕 (北東より)



D 同前近接 (北東より)



E SI-8 遺物出土状態 (東より)



F SI-8 遺物出土状態 (南より)



G SI-8 遺物出土状態 (南より)



H SI-8 カマド 遺物出土状態 (南より)



A. SI-9 南北土層 (東より)



B. 同前北側近接 (東より)



C. SI-9 完掘 (西より)



D. SI-9 完掘 (南より)



E. SI-9 掘方 (南より)



F. SI-9 掘方 (西より)



G. SI-9 掘方 (東より)



H. SI-9 P4 東西土層 (南より)



A SI-9カマド完掘 (南より)



B SI-9カマド掘方 (南より)



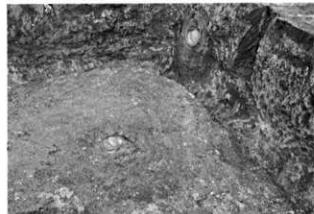
C SI-9炭化材出土状態 (南西より)



D SI-9炭化材出土状態 (南より)



E SI-9白玉出土状態 (北西より)



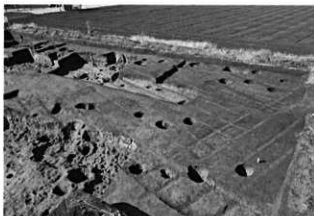
F SI-9遺物出土状態 (南より)



G SI-9近接 (南より)



H. 同前 (南西より)



A. 3区北東小穴群 (南より)



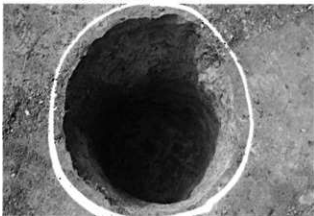
B. SB-1 完掘 (西より)



C. SB-1 完掘 (南より)



D. SB-2 完掘 (西より)



E. SB-2 P1 完掘 (南より)



F. P11 東西土層 (北より)



G. P20 東西土層 (南より)



H. P20 完掘 (北より)



A SK-1 完掘 (北より)



B SK-2 土層・完掘 (東より)



C SD-1～3・5 全景 (北より)



D SD-1・2土層 (南より)



E SD-2 遺物出土状態 (西より)



F SD-6 全景 (東より)



G SD-6 東西土層 (西より)



H SD-6 遺物出土状態 (西より)



A. SD-3 東西土層 (南より)



B. SD-5 東西土層 (南より)



C. C1区基本土層 (北より)



D. C2区基本土層 (南より)



E. C3区基本土層 (南より)



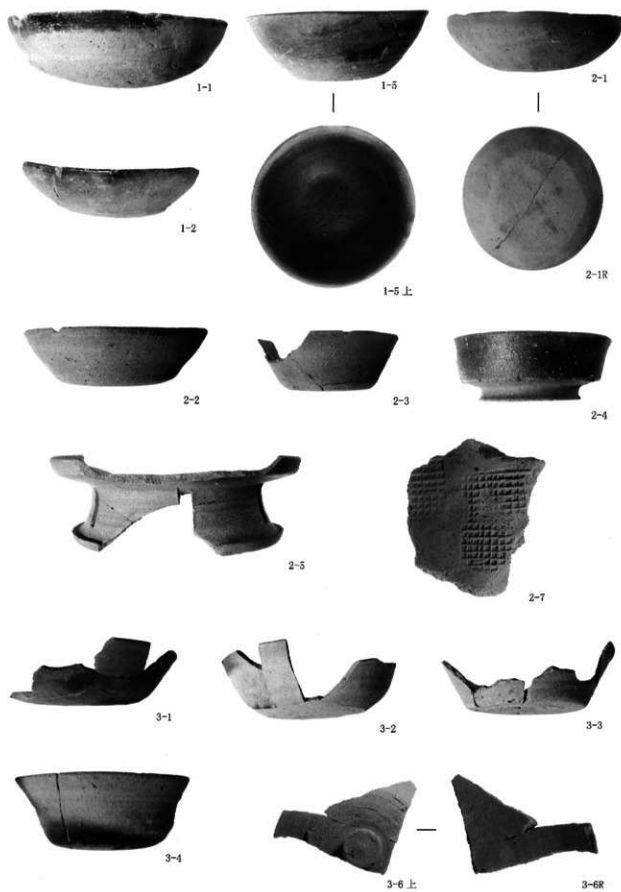
F. 調査状況 (北西より)



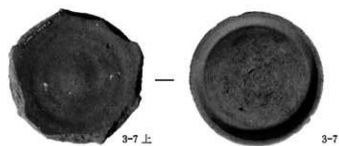
G. 市文化財審議委員による現地指導



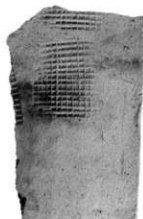
H. 同前



SI-1 ~ 3 出土遺物



3-12



1/4 3-13



1/4 3-14



3-15 上

1/2



3-15 下



1/2 3-17



1/2 3-16



1/2 3-18



1/2 3-20



1/2 3-19



1/2 3-21



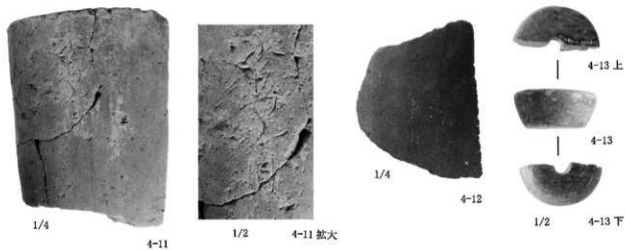
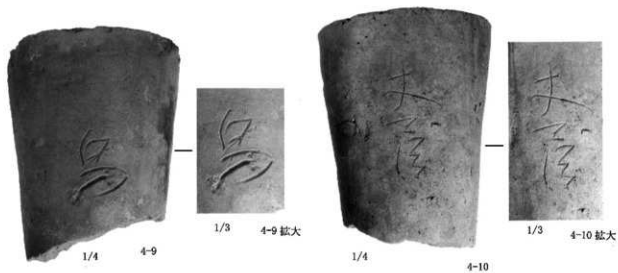
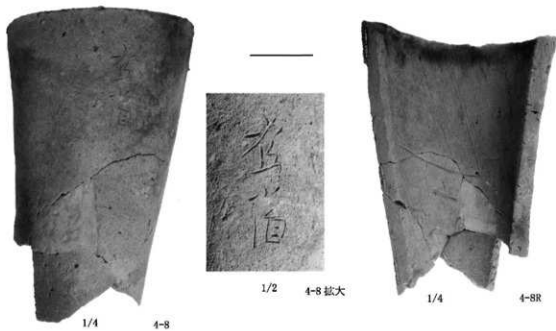
原寸 4-3

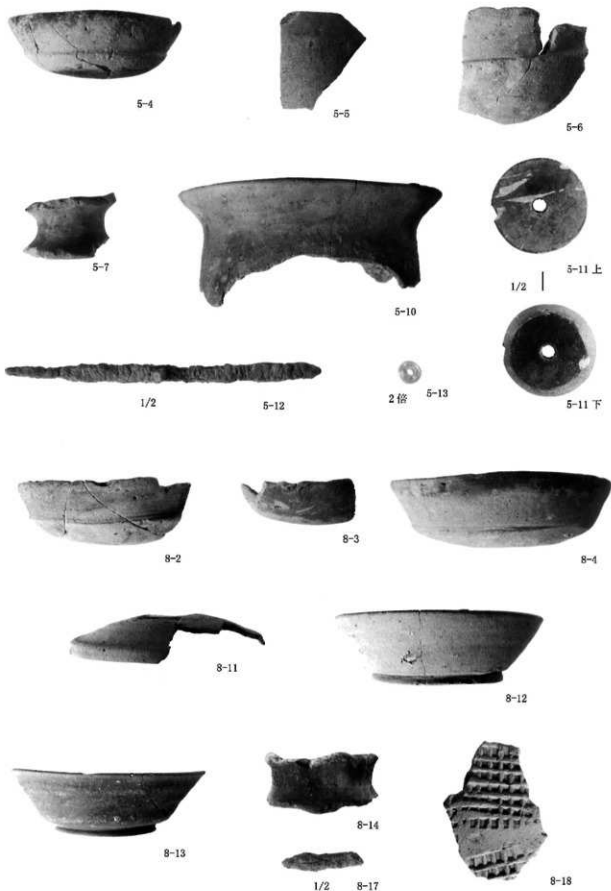


4-7



4-6





SI-5・8 出土遺物



9-2



9-3



9-11



9-7 上



1/2

9-7



9-9 上



9-11 下



9-10



9-12



原寸

9-11 拡大



9-13



9-16



9-27



9-17



9-19



9-27R



9-26

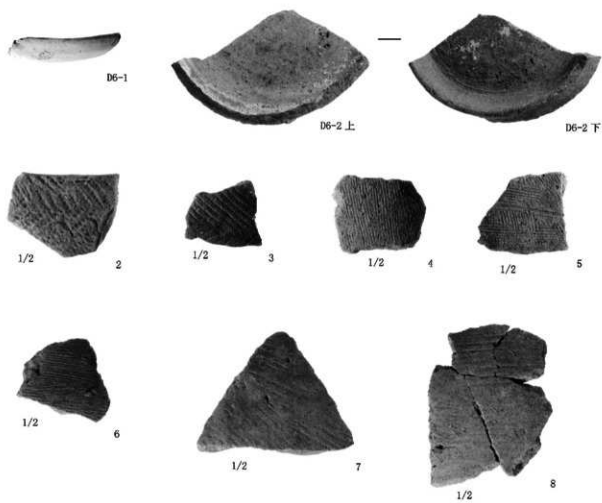


2倍 9-28



1/2

9-27 横



SD-6、調査区内出土遺物

報告書抄録

ふりがな	もばらきたはらいせきししく							
書名	茂原北原遺跡 (C区)							
副書名								
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第91集							
編著者名	君島直人・水野順敏・柏崎広伸・三輪孝幸							
編集機関	株式会社 日本窯業史研究所							
所在地	〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂 3112 TEL 0287-93-0711							
発行機関	宇都宮市教育委員会							
所在地	〒320-8540 栃木県宇都宮市旭 1-1-5 TEL 028-632-2764							
発行年月日	西暦 2015(平成 27)年 4月 30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
もばらきたはらいせきししく 茂原北原遺跡 (C区)	うつのみやしもばらきたはらいせきししく 宇都宮市茂原町宇北原 898番2他	9201	4308	36° 28' 35"	139° 52' 30"	20140904 ~ 20141028	600㎡	集合住宅 の建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
茂原北原遺跡	集落跡	・古墳～平安時代 ・中世	・竪穴住居跡 7軒 ・掘立柱建物跡 2棟 ・土坑 2基 ・小穴 約90基 ・溝 1条	・土師器、須恵器、瓦、 鉄製品、石製品、ガ ラス小玉、墨書土 器 ・中世土師器皿、埴 器鉢	古墳時代末葉から 平安時代初頭の集 落跡で、一辺 8 m を越える大型住居 跡が 2軒確認され た。			
要約	古墳時代末葉から平安時代前葉の竪穴住居跡を 7軒確認した。このうち 2軒は 8～8.3m と大型の住居跡であった。それぞれ 2～3 回の建て替え拡張を繰り返しこの規模になった。上神主・茂原官衝遺跡が南方 1 km に所在することもあり、カマドに瓦が使用され、そのうち 4 点には人名が記されていた。墨書土器も 3 点出土した。							

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 91 集

茂原北原遺跡 (C区)

発行年月日 2015 (平成 27) 年 4 月 30 日

編集 株式会社 日本窯業史研究所

〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂 3112

TEL 0287-93-0711

発行 宇都宮市教育委員会文化課

〒320-8540 栃木県宇都宮市旭 1-1-5

TEL 028-632-2764

印刷 下野印刷 株式会社

〒320-0061 栃木県宇都宮市宝木町 1-28-11

TEL 028-622-6953